

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 6 集

— 佐是城跡・岡本城跡発掘調査報告 —

昭和 60 年度

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 6 集

— 佐是城跡・岡本城跡発掘調査報告 —

昭和 60 年度

序 文

千葉県内には、数多くの中近世遺跡が所在し、それらにまつわるさまざまな史実伝承も伝えられています。千葉県教育委員会では、それらをは握するため昭和45、46年度に中近世遺跡の分布調査を実施しました。その結果、県内に586か所の所在を確認し、「千葉県中近世遺跡調査目録」として刊行しました。その中で、城館跡に関しては、文献史料による研究がかなり進められておりますが、規模・構造・性格等の実態調査はほとんどおこなわれていないのが実情です。また県内の都市化に伴う開発等も加速的増加の傾向を示しております。

そこで、千葉県教育委員会では、昭和55年度から第一次5か年計画、昭和60年度から第二次5か年計画で、中近世城館跡のうち重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れがあるものを選び、その規模、構造等をは握し保存及び活用を講ずる資料を得る目的で、測量・確認調査を実施してきました。

今年度は、市原市佐城跡・富浦町岡本城跡の2か所について調査を実施し、主要部について、規模、構造等を明らかにすることができました。

このたび、その発掘調査成果が調査概報として刊行する運びとなりました。本報告書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護・活用のため広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終りに調査にあたり多大な御協力をいただいた市原市、富浦町両教育委員会をはじめ地元関係者の方々、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員及び調査補助員の方々の御苦労に対し、心から感謝の意を表します。

昭和61年3月31日

千葉県教育庁文化課長
竹内 一雄

例 言

1. 本書は、市原市佐是所在の佐是城跡及び安房郡富浦町豊岡所在の岡本城跡の確認調査概要報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて、調査を(財)千葉県文化財センターに委託し実施したものである。
3. 調査は、佐是城跡が昭和60年10月25日～11月2日、岡本城跡が昭和60年11月18日～11月28日まで実施した。なお地形測量は業者委託で実施した。
4. 調査および整理解業・報告書作成作業にあたっては、研究部長鈴木道之助、部長補佐渡辺智信・古内茂の指導・助言のもとに調査研究員柴田龍司が担当した。
5. 調査にあたって、佐是城跡については、市原市教育委員会の関係者各位、土地所有者宗教法人明性院、鎌田実氏の方々、並びに地元佐是、西国吉の方々の御協力があった。また、岡本城跡については、富浦町教育委員会、富浦町公園管理事務所、大宮八幡社の関係者各位、忍足三郎富浦町長、岡本三郎富浦町教育委員長、並びに地元豊岡地区の方々の御協力があった。各々記して謝意を表する。
6. 調査の実施及び本書をまとめるにあたり、下記の方々により種々の御教示、御高配をたまわった。各々記して謝意を表する。(敬称略)
(財)市原市文化財センター・千葉城郭研究会・金丸義一・鈴木英啓・清藤一順・鶴岡正幸
・戸倉茂行・横尾進・鳴釜辰次・大古新蔵・小澤壽・高山隆・塞川孝一・苺草のぶ

目 次

序文

例言

I 市原市佐是城跡

1. 佐是城跡の位置と地理的環境……………1
2. 佐是城跡の歴史的環境……………1
3. 佐是城跡の概要……………5
4. 発掘調査とその概要……………10
 - (1) 調査方法と調査経過
 - (2) 調査区の概要
5. 結語……………17

挿 図 目 次

- I-1 図 佐是城跡と周辺の主な城跡……………3
- I-2 図 佐是城跡周辺の地形図……………4
- I-3 図 佐是城跡地形測量図……………7
- I-4 図 佐是城跡概念図……………8
- I-5 図 佐是城跡発掘区平面図及び土層断面図……………11
- I-6 図 佐是城跡出土遺物実測図(1)……………13
- I-7 図 佐是城跡出土遺物実測図(2)……………15

図 版 目 次

- 図版 I-1 佐是城跡航空写真
- 図版 I-2 II 郭西側の支谷，明性院郭の空堀その他
- 図版 I-3 A 区全景，001A 号址遺物出土状況
- 図版 I-4 001B 号址遺物出土状況，B 区全景
- 図版 I-5 C 区トレンチ
- 図版 I-6 佐是城跡出土遺物

II 富浦町岡本城跡

1. 岡本城跡の位置と地理的環境	35
2. 岡本城跡の歴史的環境	35
3. 岡本城跡の概要	37
4. 発掘調査とその概要	43
(1) 調査方法と調査経過	
(2) 調査区の概要	
5. 結語	48

挿 図 目 次

II-1 図 岡本城跡と周辺の主な城跡	36
II-2 図 岡本城跡周辺の地形図	38
II-3 図 岡本城跡地形測量図	41
II-4 図 岡本城跡概念図	42
II-5 図 岡本城跡発掘区平面図及び土層断面図	44
II-6 図 岡本城跡 I b 発掘区主要部平面図及びエレベーション図	46
II-7 図 岡本城跡出土遺物実側図	47

図 版 目 次

図版 II-1 岡本城跡航空写真
図版 II-2 岡本城跡遠景
図版 II-3 I a 郭から (大房岬, 北西) を望むその他
図版 II-4 I a 郭土橋, 空堀 A その他
図版 II-5 (イ) 地点, III 郭石塁状遺構, 光厳寺境内里見義頼の墓
図版 II-6 水堀 (榊ヶ池)
図版 II-7 I b 区中央部完掘状況
図版 II-8 I b 区 010 号址, 011 号址完掘状況
図版 II-9 I b 区中央部掘り方状況, 001 号址
図版 II-10 I b 区 017 号址, I a 区全景
図版 II-11 岡本城跡出土遺物

I 市原市佐是城跡



千葉県

I 市原市佐是城跡

1. 佐是城跡の位置と地理的環境 (I-1, 2 図)

佐是城跡は、市原市佐是字武城及び西国吉字曲輪を中心とした地区に所在している。内房線五井駅から養老川に沿って走る小湊鉄道(私鉄)上総牛久駅から西北西に直線距離で約1.4kmのところにある。

この地域は地形的には上総丘陵北部に位置し、標高100m~180m程を測る。この丘陵をぬって夷隅郡大多喜町の山間部を源流とする養老川がほぼ北北西に蛇行を繰り返しながら、市原市五井地区で東京湾に流れ込む。

城跡は、養老川中流の左岸に接し南から北に突き出した舌状台地に占地しており、標高50m~60mと北に行くにしたがい低くなっている。東西約500m~600m、南北約1,000mの規模である。この舌状台地のあたりは、養老川が形成した沖積地が1,000m程の幅となり、また川の流路が北西から北北西に変わる基点でもある。このために、台地上からは、南東方面の牛久・鶴舞方面、北東の馬立方面が望むことができ、養老川流域内では眺望のきく場所である。ただ、南側は標高100m程の丘陵に続き、西側も支谷を挟んで丘陵と近接していることから眺望の点からみるならば城が立地する場所としては難点となるであろう。

このことは、佐是城の性格を考えるうえで大きな問題点となりうるであろう。特に南側が標高100m程の丘陵に直接連なることは、丘陵上から城域全体が見通されることを意味している。これは、防禦施設としての城としては致命的な欠点であるが、利点としての養老川流域をかなりの範囲で見通すことができることと、後述する歴史的環境も含めて考えると、自ら佐是城の歴史、性格が浮かび上がるのではないだろうか。

なお、現在の城跡は、大部分は山林と畑地によって占められ、外縁部に若干の宅地がみられる程度で、市原市内のみならず、千葉県内でも有数の保存状況が良好な状態で残されている。

2. 佐是城跡の歴史的環境 (I-1 図)

佐是城跡が所在する市原市佐是地区は、「和名抄」に見える上総国海上郡左弓(三)郷に比定される地域である。

城跡の周辺は、縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の遺跡と中世城跡が数多く分布している。古代以前については、特に弥生・古墳時代の遺跡が顕著で、中でも古墳群は城跡周辺の上高根・南岩崎・根元・西国吉地区にみられるばかりか、城跡内にもいくつかの古墳が存在している。実際に今回の発掘調査によっても古墳時代の住居址や土器と共に埴輪も検出されている。

中世に入ると、当地も含めた養老川中流から上流にかけては佐是郡と文献に見える。平安時

代末から鎌倉時代初めには平姓上総氏の所領であつたらしく、上総氏の没落後は行方氏・畑田氏らの常陸平氏に南北朝期頃まで伝領された。室町時代には、佐是郡内の内田郷が高師長の所領であったことが文献で確認される。

当地域に限ったことではないが、中世においてはわずかな文献で所領の変遷が追える程度で、研究面での遅れも手伝ってほとんど不明といわざるをえない状況である。

さて、佐是城の歴史に関しては、武田信長の子上総介信高の三男国信を佐是城に入れたと「庁南武田氏系図」に見え、また「市原郡誌」（市原郡教育会1916）に天文年間（1532～54）佐瀬三郎武田国信が築城したとある。いずれの資料も信憑性には大いに欠けるが、現在のところ佐是城に関する当時の文献が全くないことから参考資料としての意味で言及することにした。ただし、佐是城の形態（縄張り）が16世紀代のものであり、また16世紀代の養老川流域が上総武田氏を中心として、里見氏・後北条氏との抗争の場であったことは確実なので、以後上総武田氏を中心に当地域の動きを概観してみたい。

上総武田氏は、15世紀中頃関東を戦乱に巻き込んだ関東管領上杉氏と古河公方の抗争の中で、古河公方足利成氏の支援により武田信長が康正2年（1456）に上総に侵入して勢力基盤を築いたといわれている。

当時の上総・安房地域は概して上杉氏系の在地領主層が支配していたが、上総武田氏や里見氏のような古河公方系の勢力が突然のように侵入して各々勢力を築いている。また15世紀後半から16世紀初めにかけては、後に万喜城（夷隅郡夷隅町）を居城とする土岐氏や、土気城（千葉市）と東金城（東金市）を居城とする酒井氏のような現在の郡単位ぐらいを勢力下とする国人領主層が出自をはっきりさせないまま出現している。

15世紀後半に上総北部に勢力を上げた上総武田氏は、真里谷城（木更津市）と庁南城（長生郡長南町）に拠点を構えて、それぞれ独立性の強い国人領主層として発展していった。

庁南城を居城とした庁南武田氏は、現在の長生郡市を中心とした地域を勢力範囲とし、小弓公方足利義明・里見氏・後北条氏とこの地域に大きな影響を与えた勢力と巧みに関係を結び、また隣接する土気城（千葉市）・東金城（東金市）の両酒井氏や万喜城（夷隅町）の土岐氏との抗争を繰り返しながら、天正年間（1573～91）頃には後北条氏の勢力下に入りながらも、16世紀を通じてほぼ独立した勢力を維持した。天正18年（1590）頃の毛利文書所収「関八州城之覚」（神奈川県史3、1979）によれば、長南城（＝庁南城）を居城として、池和田城・かつみ城を主要な支城としており、動員兵力は千五百騎を数えている。池和田城跡は、佐是城跡から南東に5 km程のところにあり、佐是城の歴史を考える上で無視できない位置である。天正18年豊臣秀吉によって後北条氏は亡び、庁南武田氏もまた運命を共にした。

真里谷城を居城とした真里谷武田氏は、16世紀初め頃には、小弓城（千葉市）を居城とした原氏と下総南部から上総北西部（現在の千葉市南部から市原市北部の東京湾沿岸地域）で抗争



(1 : 100,000)

I-1 図 佐是城跡と周辺の主な城跡
(国土地理院「姉崎」 1 : 50,000 使用)



I-2図 佐是城跡と周辺の地形
 (京葉測量KK作製 1:10,000使用)

(1:20,000)

を繰り返していたらしい。この抗争に決着を付けるため、真里谷武田氏は古河公方足利政氏の子義明を迎へ、小弓城を原氏から奪い彼を入城させた。以後足利義明は小弓公方と称し、里見氏も含めた上総・安房の領主層の盟主的存在としてこの地域に勢力を拡げることとなった。おそらく、この頃が真里谷武田氏にとっては全盛期であり、上総西半はもとより上総東部の大多喜あたりまで勢力を拡げていたと思われる。しかし天文7年(1538)の第一次国府台合戦で後北条氏によって小弓公方足利義明を盟主とした上総・安房の連合勢力が敗れたため、真里谷武田氏は大きな打撃を受けることとなった。戦後は小弓公方に替って里見氏の勢力が増し、反面真里谷武田氏は内紛を繰り返したこともあり、16世紀中頃にはほぼ里見氏の勢力に繰り込まれたと思われる。永禄7年(1564)の第二次国府台合戦によって、里見氏が後北条氏に敗れ、上総に後北条氏が進出してきた時は一時的に里見氏から離反したと思われるが、天正18年(1590)を境いとして後北条氏の滅亡と里見氏の安房への撤退の時点では、全くといっていいほど歴史上には見られなくなってしまっている。このことは、先に触れた毛利文書に全く記載されておらず、また近年行われた真里谷城の発掘(伊礼、牛房他1984)においても、出土遺物は16世紀前半の様相を示していることから立証されるだろう。

ところで、佐是城を中心とした養老川中流域に限って見てみれば、天文7年(1538)の第一次国府台合戦までは、佐是城から南南西6kmにある真里谷城との関係から、この地域は真里谷武田氏の勢力下であったであろう。16世紀中頃から末までは、里見氏・後北条氏・疋南武田氏、多賀氏と大小の勢力が錯綜する地域であり、佐是城に関しては近世以降の記録ばかりでなく伝承にもこの時期については伝えられていない。

3. 佐是城跡の概要 (I-2図、I-4図)

城跡の概観

佐是城跡は、1章で述べたように上総丘陵から北に突出する舌状台地上に占地している。台地東側は養老川に接し崖状を呈し、西側は台地中央部を南北に入り込む上幅70m~80mの支谷によって区切られる(図版I-2)。南側は南北の支谷が東に狭くなりながら入り込むことから、このあたりが城域として南限と思われる。以上のごとく川と支谷によって区切られた範囲を城域と捉えるならば、東西450m・南北650m程の規模となる。標高は50m~60mで北に行くにしたがい徐々に低くなる。比高差は北東端で集落と25m、南東端でやはり集落とは30m程を測る。

全体の構造(縄張り)は大きく5ヶ所の郭に分けられ、各郭間は空堀や段差によって区切られる。また郭の斜面には帯曲輪や腰曲輪が伴っている。(註1) 以下各郭について述べることにする。

I 郭周辺

小字名を「武城（タケギ）」と呼び、最大東西95m、南北100mの規模で、標高59m～65mを測る。近世城郭では本丸に相当する郭である。

北から北西側はII郭との間に元来は奥行き浅い支谷が入っていたが、腰曲輪を何段にも築き防禦を固めている。現在下の集落に通じる道があるが、腰曲輪の配置や虎口（出入口）らしきものが認められることから、当時も道があったものと思われる。(ア)の平坦部は現在廃屋が建っており低い段差は新しい所産かもしれないが、規模からみて郭に近い性格を有していたであろう。(ア)からは空堀Aが南東に延びていて、I郭とIII、IV郭とに区切られる。この堀を境いにして北が佐是地区、南が西国吉地区となる。

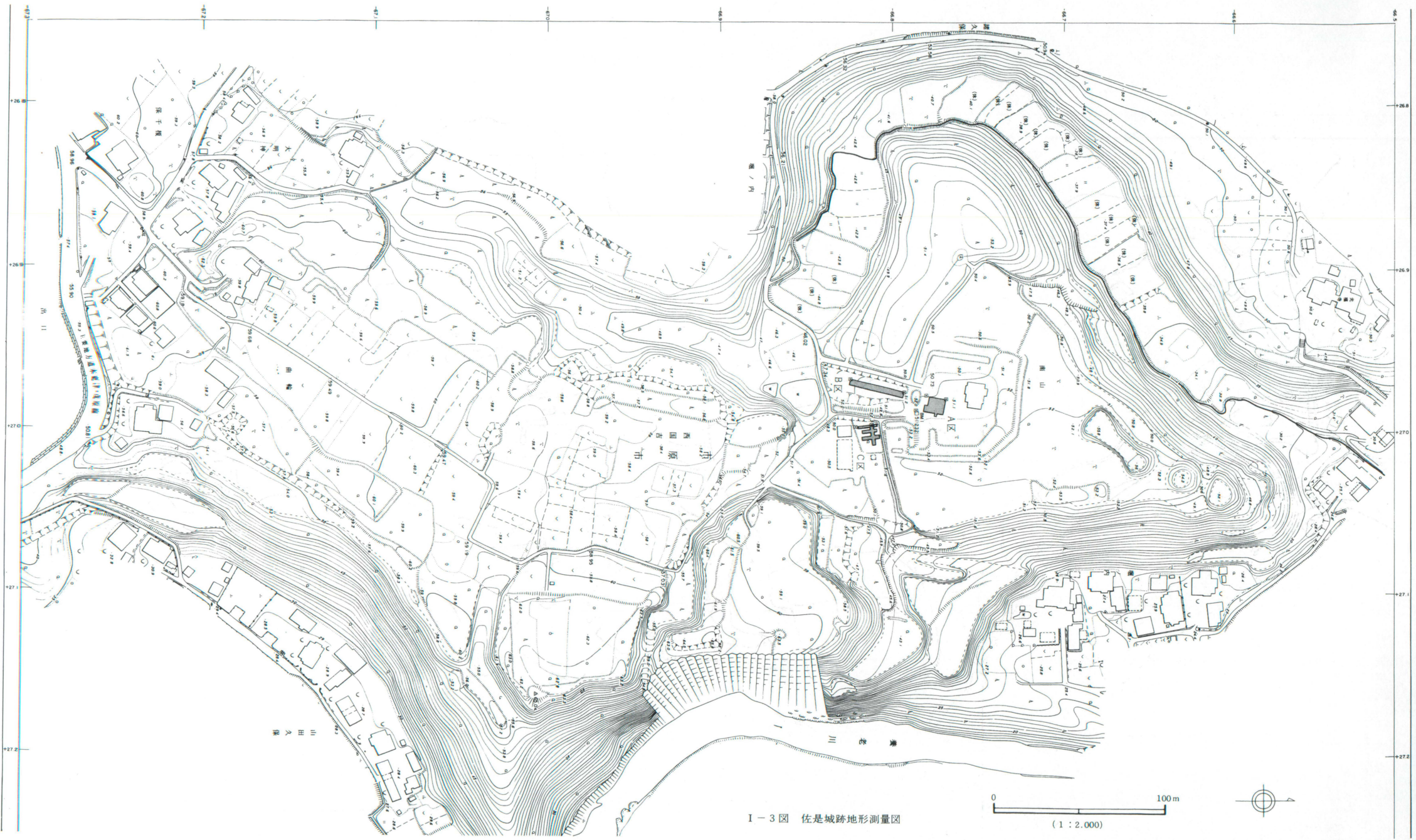
I郭上面は、南辺のみに下幅最大10m、高さ2m程の土塁がある。また南辺中央部には明瞭ではないが張り出し部（外柵形）があり、空堀A（図版I-2）はここでゆるやかにカーブしている。敵に対して側面からの攻撃を仕掛けるためである。南東端も大きく張り出していて、土塁も一段と高くなっている。ここでの空堀の深さは両脇に比べ4m程高くなっていることと、土塁の高まりからI郭とIII郭を結ぶ通路を想定できる。東側は養老川の攻撃面に直接面していて斜面中程まで垂直に近い状況である。多少崩壊で消滅したところがあると思われる。防禦的にみるとI郭は最も完備したものといえる。

II 郭周辺

小字名を「岩井台」「南山」と呼び、最大東西230m、南北270mの規模を有し広面積な郭である。標高は50m～52mを測り、I郭よりは7m低い。

郭中央部に東西78m、南北59m～80mの規模で土塁、空堀を巡らせた郭がある。現在郭内に明性院が建っていることから、この郭を明性院郭と呼称する。東北角が面取りされたようなカーブをする外は、空堀はほぼ正方形に近いかたちで南辺の一部を除いて四周する。西辺は2条認められる。堀幅は広いところで5m、深さは50cm程である。また東辺から北辺にかけて空堀の内側に土塁が併走する。堀底から1.5m程の高さとなる。南東端は土塁が張り出したり、直角に曲がったり、高低差を変えたりして複雑な様相を示す。郭内の一部を発掘調査した(A区)。II郭西側から南側に廻り込んだ支谷から空堀Cが明性院郭の南辺まで認められる。空堀の東側には土塁が併走する。空堀Cは現状では深いところで1m程を測り、その西側と東側をそれぞれ発掘調査した(B区、C区)。

II郭北東端には空堀Bと腰曲輪群が認められる。空堀Bの南側にある(イ)は円墳、(ウ)は前方後円墳で、それぞれ佐是古墳群C群のNo.1古墳(イ)、No.2古墳(ウ)と呼ばれる周知の古墳である。(註2) 両古墳とも上面は平坦になっていることから、物見台のような形で利用されていたのであろう。(エ)は現状では1m程の高まりであるが、平面プラン・規模及び土塁とは考えられないことから前方後円墳の残存部と思われる。



I-3 图 佐是城跡地形測量図

(1 : 2,000)

II郭は、明性院郭を除いて広大な面積の郭取りにもかかわらず、空堀や腰曲輪があまり認められず、防禦面からみれば非常に弱い郭といわざるを得ない。また郭内に古墳が存在していることは、あまり築城時に手を加えていないとも考えられる。明性院郭は、平面プラン・規模・位置・現状遺構から判断すれば日常生活が営まれた館跡と考えられるが、発掘調査の成果からは否定的な見解となった。

III郭周辺

呼称として「エダグラ」といわれており、枝曲輪が転化したものであろうか。III郭から大字西国吉となる。北辺を空堀A、南辺を空堀Dによって区切られ、西辺を段差によってIV郭と分けられる。東西90m、南北85mの規模を有し、標高60mと62mの2段に分かれる。平坦面での比高差はI郭より2m高いが、I郭南辺の土塁の方が高く築かれている。

III郭南東端には櫓台址と思われる高まりがあり、空堀Dが斜面に達する地点を見下す位置となる。空堀DはIII郭面と堀底面の比高差7m、III郭とV郭上面で16mの幅となり、東側斜面部には帯曲輪がみられる。西端部で途切れていて、現状では続くかどうか判断出来ないが、本来は空堀Fと一対のものであったろう。

IV郭周辺

呼称として「ウチグラ」といわれており、内曲輪が転化したものであろう。北辺を空堀A、西辺を支谷、南辺を空堀Fによって区切られる。東西120m、南北130m程の規模で57m～59mの標高である。北辺と南辺中央部にそれぞれ張り出し部がみられる(カ、図版I-2)。(カ)には現在八幡社の祠がある。西辺には上幅13m、深さ1.5mの空堀Eがあり、外側に土塁状の帯曲輪と腰曲輪が付設している。(オ)は櫓台址と思われ、南側の堀状の落ち込みから考えて虎口施設に伴うものであろう。空堀Fは西端部だけが2.5～3m程の深さがあるものの、その外は60cm前後の深さしかない。また西端部は上幅13mであるが、中央部あたりでは24mとなることから、中央部あたりでは現状で判断できる幅や平面プランで復元することには危険があるかもしれない。(カ)の張り出しを考えると、このあたりで堀は曲折していたかもしれない。空堀Dとの関係は段差や等高線の入り方と道の通り方によって復元したものである。

V郭周辺

小字名を「曲輪」と呼び、北西-南東160m、北東-南西190mの規模を有し、標高60m程を測る。最も南端の郭であり広面積な点から城郭用語で「外曲輪」といわれるものに相当する郭である。西辺は支谷に面し比高差は4m～5m程しかなく、しかも大雑把な腰曲輪の造りであり強固とはいえない。東辺は土塁や段差によって長方形プランに区画されている。城に伴う屋敷群とも考えられるが、近年まで宅地として利用されていたようなので、この点を考慮に入れなければならない。(キ)は空堀状の痕跡であり、(ク)は「内柵形虎口」といわれる施設に似ており、正面の櫓台状高まりも含めてみると、いかにもそれらしい形態にみえる。南辺中央部

から西辺にかけて土塁の高まりが連続してみられる(ケ、図版I-2)。現在宅地に入るには3回曲がらなければならない。この地点(ケ)は城の大手口に当たる場所と想定できるので、大手口の施設そのものとしてみることも可能であるが、大手口の施設が非常に残存しにくい傾向であることと、近世豪農の屋敷を区画する土手である可能性から即断はできない。ただ、(ケ)の西側からV郭西辺の遺構との繋りから一連の遺構として捉えるならば、先述した屋敷群や(ク)の虎口状施設と共に16世紀後半以降の中世城郭としては極めて新しい形態を留めていることとなる。

以上I郭～V郭とその周辺について概観してきたが、佐是城跡の西側を区切る支谷の西側にも若干城郭遺構が認められる。例えばII郭北西の光福寺の周囲には土塁があり、斜面には腰曲輪が何段かみられる。他にもところどころ腰曲輪があり、本来ならばこれらの地域も含めて佐是城を捉えねばならないであろう。ただし、支谷より西側の台地には現在多数の古墳が群生していることから、ほとんど築城時には手を加えていないことは確かである。

註

1. 台地上の広い面積を有する一画を「郭」、斜面中段にある平坦地で帯状に細長いものを「帯曲輪」、方形及至は三角形の平面プランのものを「腰曲輪」と呼ぶこととする。
2. (財)市原市文化財センター鈴木英啓氏の御教示による。

4. 発掘調査とその概要 (I-3～7図)

(1) 調査方法と調査経過

発掘調査は、昭和60年10月25日から11月2日までの間で、実質6.5日間にわたって実施した。調査は先ず発掘区の伐木・伐採から始まり、平行して調査区の設定を行なった。調査区は3ヶ所設定してA区、B区、C区と呼称し、それぞれ地形条件に合わせて略南北線を基準にした。A区からB区、C区と順次表土層から手掘りで掘り下げた。

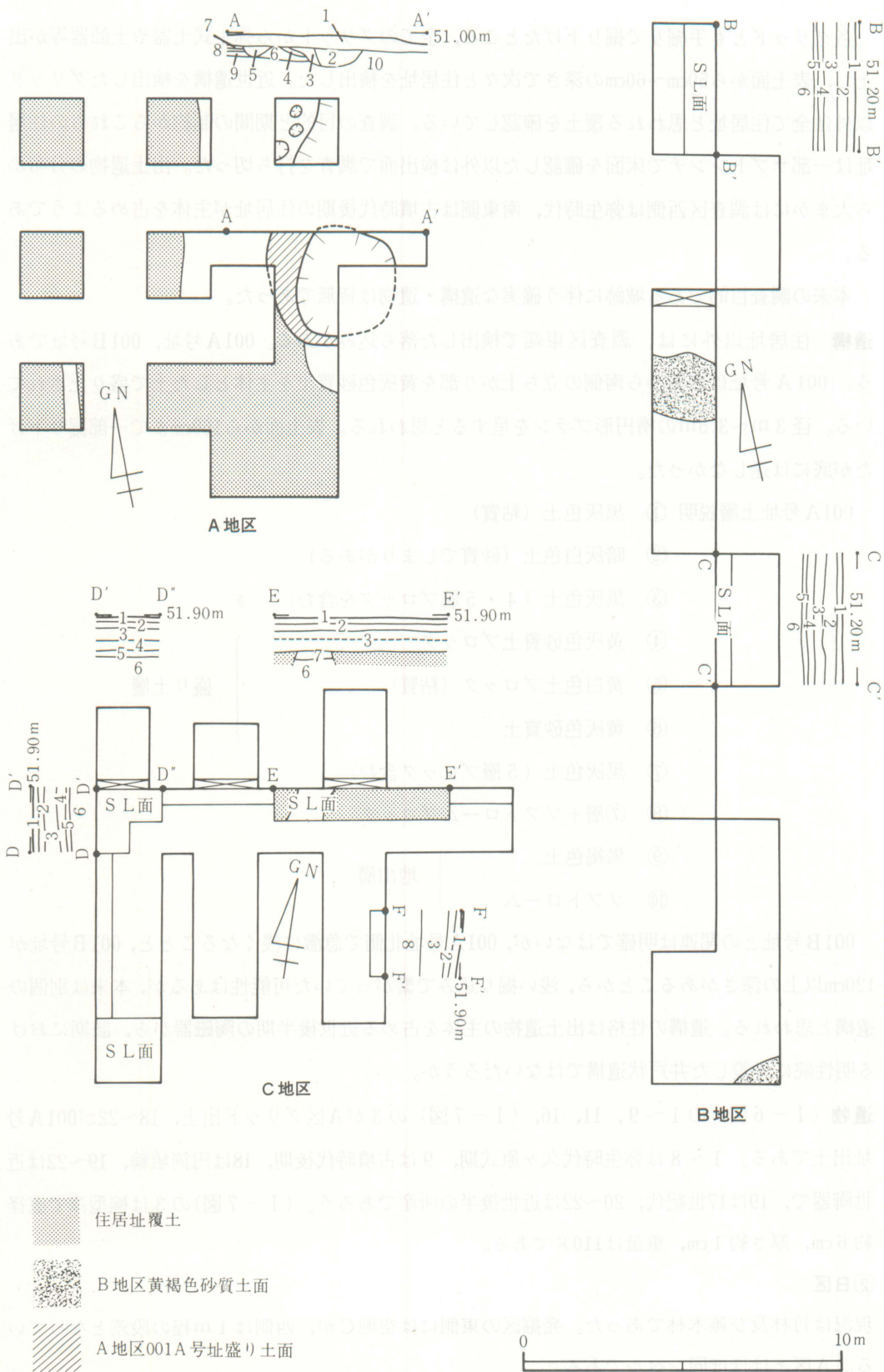
A区は2m×2mのグリッドを基本に掘り始め、遺構状況や土層を観察するために拡張していった。B区は2m×4mのグリッドを基本に略南北方向32m間に交互に設定した。C区は2m幅のトレンチを略南北方向に3本、それに直交する型で1本設定した。

調査面積は、A区56㎡、B区71㎡、C区73㎡で合計200㎡である。

(2) 調査区の概要

① A区

2章城跡の概要で述べたII郭内明性院郭内で、明性院の境内に当る。現況は寺が無住のため草地であった。



I - 5 図 佐是城跡発掘区平面図及び土層断面図

各グリッドとも手掘りで掘り下げたところ、全てのグリッドから弥生式土器や土師器等が出土し、表土面から50cm～60cmの深さで次々と住居址を検出した。近世遺構を検出したグリッド以外は全て住居址と思われる覆土を確認している。調査の目的と期間の制約からこれらの住居址は一部サブトレンチで床面を確認した以外は検出面で調査を打ち切った。出土遺物の分布から大まかには調査区西側は弥生時代、南東側は古墳時代後期の住居址が主体を占めるようである。

本来の調査目的である城跡に伴う確実な遺構・遺物は皆無であった。

遺構 住居址以外には、調査区東端で検出した落ち込みがある。001A号址、001B号址である。001A号址は西側から南側の立ち上がり部を黄灰色砂質土を主体とした土で盛り土されている。径3m～3.5mの楕円形プランを呈すると思われる。表土面から160cmまで一部掘り下げたが底には達しなかった。

001A号址土層説明 ① 黒灰色土（粘質）

② 暗灰白色土（砂質でしまりがある）

③ 黒灰色土（4・5層ブロックを含む）

④ 黄灰色砂質土ブロック

⑤ 黄白色土ブロック（粘質）

⑥ 黄灰色砂質土

⑦ 黒灰色土（5層ブロック含む）

⑧ ⑦層+ソフトロームブロック

⑨ 黒褐色土

⑩ ソフトローム

} 盛り土層

} 地山層

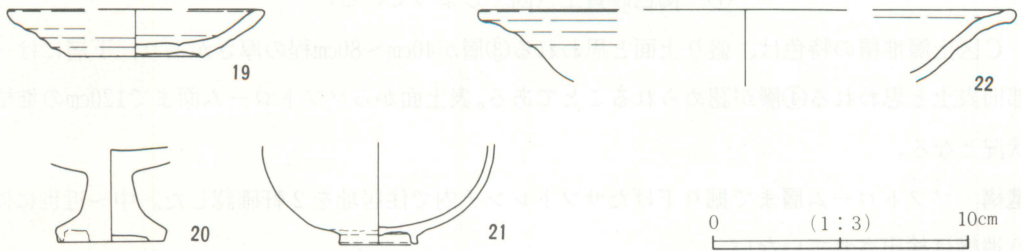
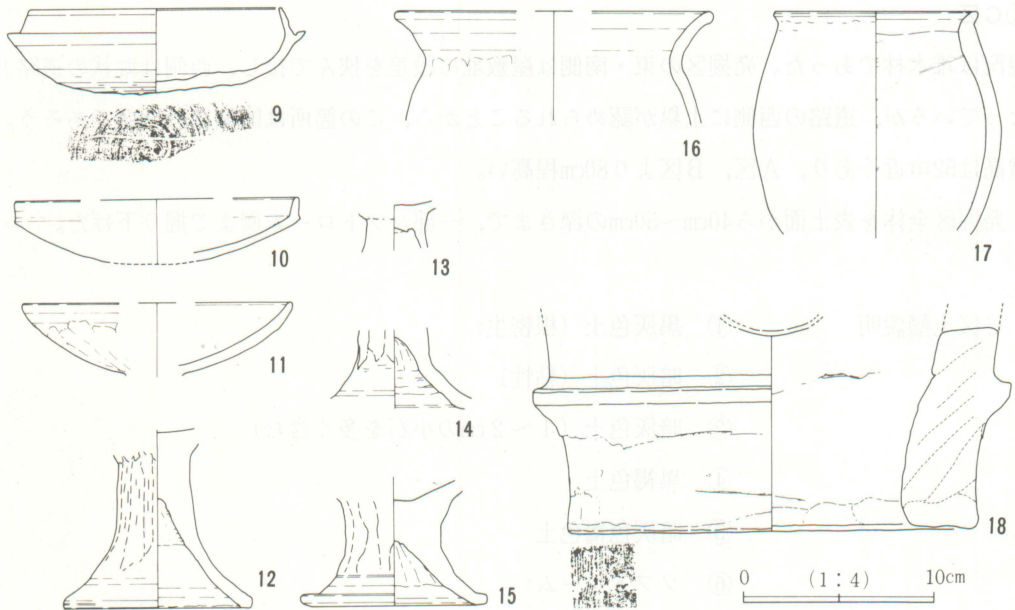
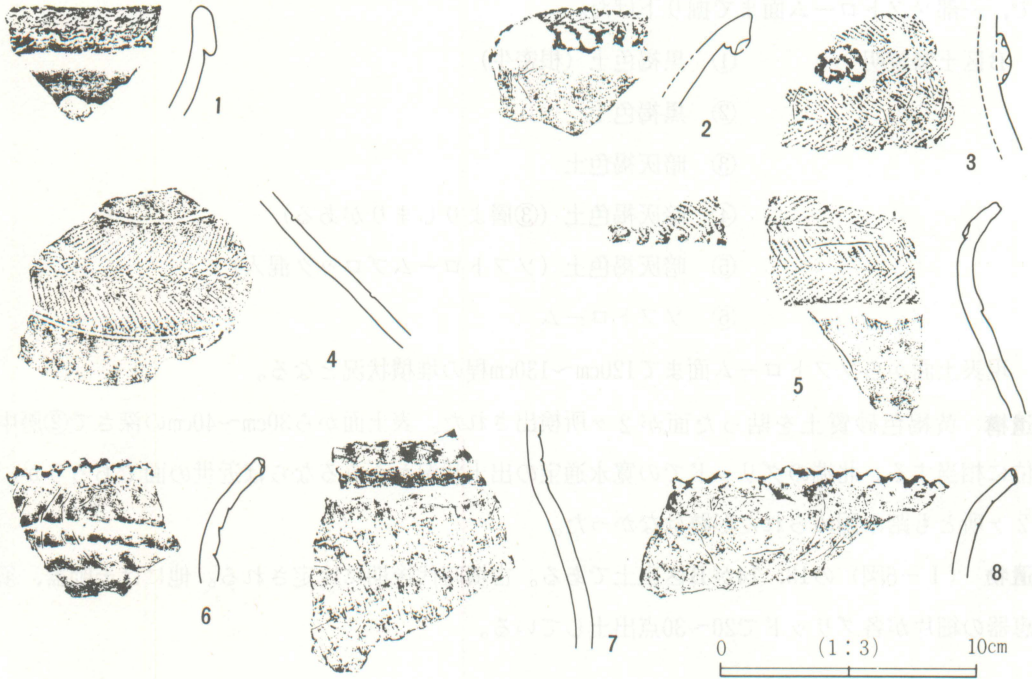
001B号址との関連は明確ではないが、001A号址北側で急激に浅くなることと、001B号址が120cm以上の深さがあることから、浅い掘り込みで繋がっていた可能性はあるが、本来は別個の遺構と思われる。遺構の性格は出土遺物の主体を占める近世後半期の陶磁器から、該期における明性院に付設した井戸状遺構ではないだろうか。

遺物（I-6図）の1～9、11、16、（I-7図）の3がA区グリッド出土、18～22が001A号址出土である。1～8は弥生時代久ヶ原式期、9は古墳時代後期、18は円筒埴輪、19～22は近世陶器で、19は17世紀代、20～22は近世後半の所産であろう。（I-7図）の3は椀型滓で直径約6cm、厚さ約1cm、重量は110gである。

②B区

現況は竹林及び雑木林であった。発掘区の東側には空堀Cが、西側は1m程の段差となっている。A区とはほぼ同レベルである。

寛永通宝が現表土面から30cmの深さで出土したことから、全体に50cm～80cmの②層～③層面ま



I - 6 图 佐是城跡出土遺物実測図 (1)

で、一部ソフトローム面まで掘り下げた。

- B区土層説明
- ① 黒褐色土（根密生）
 - ② 黒褐色土
 - ③ 暗灰褐色土
 - ④ 暗灰褐色土（③層よりしまりがある）
 - ⑤ 暗灰褐色土（ソフトロームブロック混入）
 - ⑥ ソフトローム

現表土面からソフトローム面まで120cm～130cm程の堆積状況となる。

遺構 黄褐色砂質土を貼った面が2ヶ所検出された。表土面から30cm～40cmの深さで②層中位に相当する。北端のグリッドでの寛永通宝の出土状況からみるならば近世の面であろうか。2ヶ所とも踏み固められた形跡はなかった。

遺物（I-6図）の13, 14がB区出土である。古墳時代後期に比定される。他には土師器、須恵器の細片が各グリッドで20～30点出土している。

③C区

現況は雑木林であった。発掘区の東・南側は屋敷址に段差を挟んで接し、西側は堀状の道路となっているが、道路の西側に土塁が認められることから、この箇所は廃城後の所産であろう。標高は52m近くあり、A区、B区より80cm程高い。

発掘区全体を表土面から40cm～50cmの深さまで、一部ソフトローム層まで掘り下げた。

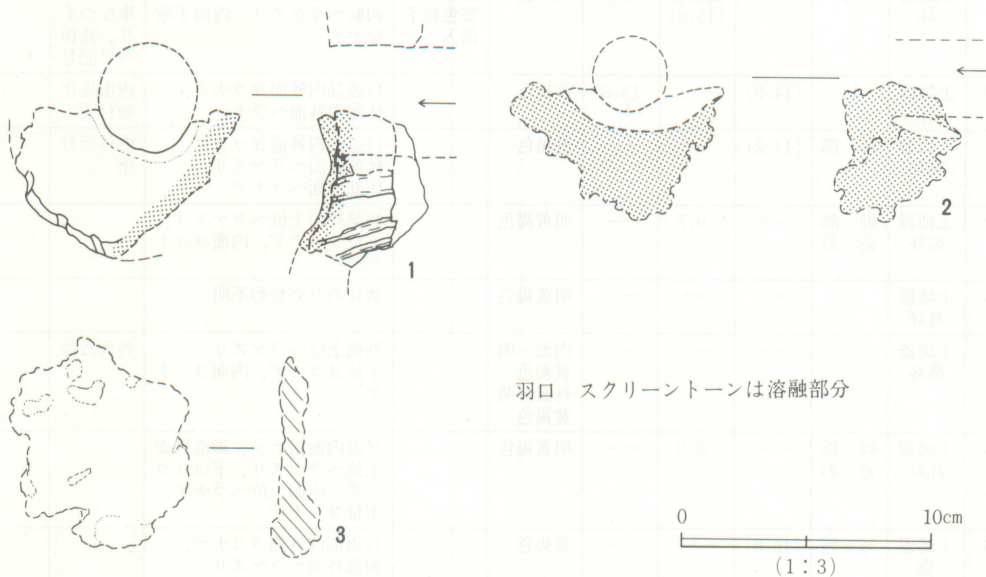
- C区土層説明
- ① 黒灰色土（根密生）
 - ② 暗灰色土（粘性）
 - ③ 暗灰色土（1～2cmの小石を多く含む）
 - ④ 黒褐色土
 - ⑤ 暗灰色褐色土
 - ⑥ ソフトローム
 - ⑦ 褐色砂質土（固くしまっている）

C区土層堆積の特色は、盛り土面と思われる③層が40cm～80cm程の厚さがあり、下層には一部旧表土と思われる④層が認められることである。表土面からソフトローム面まで120cmの堆積状況となる。

遺構 ソフトローム層まで掘り下げたサブトレンチ内で住居址を2軒確認した。中～近世に伴う遺構は検出されていない。

遺物（I-6図）の10, 12, 15, 17と（I-7図）の1, 2がC区出土である。12, 15, 17

は住居址覆土上面からの出土で古墳時代後期に比定される。1, 2 は共に羽口である。いずれも約 $\frac{1}{2}$ の遺存で、1 は直径約 4 cm, 2 は 2.5 cm ~ 3 cm と推定される。羽口は中世以後の所産と推定される。1, 2 は③層下部出土。(註 1)



I - 7 図 佐是城跡出土遺物実測図 (2)

佐是城跡出土遺物 (I - 6 図)
弥生土器

挿図番号	品 種	文 様 の 特 徴	整 形 の 特 徴	色 調	胎 土	そ の 他	図 版
1	埴口辺部	口縁外面に 3 単位の連続結節文 (R)	内面剥落のため整形不明、外面ヨコナデ	黒褐色	砂粒、バミス状粒子混入		
2	壺口辺部	口縁外面に 2 単位の連続結節文 (R)、口縁下に器具不明の押捺痕	内面剥落のため整形不明、外面ヘラナデ	明黄褐色	石英粒多量混入	頸部にベンガラ塗付	
3	壺頸部~胴部	外面に 2 単位の羽状繩 (LR)、ボタン状円盤上には 8ヶ所の刺突	内面剥落のため整形不明	明黄褐色	バミス状粒子多量混入		
4	壺胴部上位	沈線内繩文帯 (LR)、3 単位の連続結節文、繩文帯 (RL)	内・外面ヘラナデ		外面—黄褐色 内面—黒褐色	石英粒多量混入、外面無文部ベンガラ塗付	
5	広口壺口縁~胴部	口唇部繩文 (RL)、外面 1 単位半の羽状繩文帯 (LR、RL、LRの順) 内面口縁部繩文 (RL)、口縁下繩文原体圧痕 (3 段)	外面指ナデ、内面ヨコナデ	外面—黒褐色 内面—黄褐色	バミス状粒子砂粒混入		
6	甕口辺部	口唇部繩文原体による交互押捺 (3 段~4 段)、胴部外面に輪積痕	内面上位ハケ、下位指ナデ、外面荒い指ナデ後ヘラナデ	外面—黒褐色 内面—黄褐色	微砂粒混入		
7	甕胴部	外面に輪積痕 (3 段あるいはそれ以上)	内面ヘラナデ、外面指ナデ後荒いヘラナデ	外面—黒褐色 内面—黄褐色	石英粒混入		
8	甕口辺部	口唇部指頭による交互押捺	内外面ヘラナデ	明黄褐色			

土師器・須恵器

挿図 番号	器 種	遺存度	法 量 (単 位 cm)			色 調	胎 土	整 形 の 特 徴	その他	図 版
			口 径	底 部	器 高					
9	須恵器 環	1/2	13.1	受部径 (15.6)	4.3	灰黒色	白色砂粒 黒色粒子 混入	外面上位ロクロナデ、下位 回転ヘラケズリ、内面丁寧 ナナデ	薄手の丁寧なつくり、底面 ヘラ記号	I-6
10	土師器 環	1/3	(14.8)	—	(3.3)	黄褐色		口辺部内外面ヨコナデ、 体部内外面ヘラナデ	内面炭化 物付着	
11	土師器 高環	環部 1/3	(14.2)	—	—	黄褐色		口辺部内外面ヨコナデ、 体部外面ヘラケズリ、 体部内面ヘラナデ	内外面丹 塗	
12	土師器 高環	脚 部 完 形	—	9.7	—	明黄褐色		脚部外面上位ヘラケズリ、 下位ヨコナデ、内面ヨコナ デ		
13	土師器 高環		—	—	—	明黄褐色		磨耗のため整形不明		
14	土師器 高環		—	—	—	内面—明 黄褐色 外面—明 黄褐色		外面上位ヘラケズリ、 下位ヨコナデ、内面ヨコナ デ	外面丹塗	
15	土師器 高環	脚 部 完 形	—	9.9	—	明黄褐色		環部内面指ナデ、脚部外面 上位ヘラケズリ、下位ヨコ ナデ、内面上位ヘラナデ、 下位ヨコナデ		
16	土師器 甕	1/2~1/3	(16.6)	—	—	黄褐色		口辺部内外面ヨコナデ、 胴部外面ヘラケズリ、 内面指ナデ		
17	土師器 無頸壺	1/2	(10.5)	—	—	黒褐色		口辺部内外面ヨコナデ、 胴部外面ヘラケズリ、 内面指ナデ		
18	円筒 埴輪	1/4	—	(21.4)	(10.6)	茶褐色	シャモツ トを含み 砂質	粘土紐巻き上げ整形。 外面凸帯底縁部ヨコナデの 他はハケ調整(1cm当り6 ~7本)、内面、底縁指ナデ	タガの高 さ0.9~ 1.0cm	I-6

近世陶磁器

挿図 番号	器 種	遺 存 度	法 量 (単 位 cm)			文 様、整 形、釉 の 特 徴	胎 土	その他	図 版
			口 径	底 径	器 高				
19	陶 器 鼠志野	1/3	(9.7)	4.9	1.8	全面に長石釉施釉。文様はみられない。底面は回転ヘラケズリ。	乳 白 色	口縁~体 部の一部 にスス状 炭化物	I-6
20	陶 器 仏飯器	台部完存		3.8		台部上位に二条線(黒釉)。外面は乳 桃色の長石釉。	明黄褐色		I-6
21	陶 器 碗	1/3		2.2		底部を除き内外面灰白色釉。表面に 細かい貫入。	乳 白 色		I-6
22	陶 器 皿	1/4	(20.6)			淡黄緑色灰釉。貫入が入る。	乳 白 色		I-6

註1. 製鉄関係の遺物については穴沢義功氏から、他の遺物については(財)千葉県文化財センター小高春雄、永沼律朗各氏から御教示を得た。
また円筒埴輪と一部の須恵器については同センター白井久美子氏から実測図の提供を受けた。

5. 結語

要点をまとめると次のようなことがあげられるであろう。

(1) 測量調査の成果

- ① 佐是城跡は舌状台地先端部に占地し、東西450m、南北650mの規模を有する。
- ② I～V郭に区切られるが、全体的には大まかな郭配置である。
- ③ I郭とIV郭に見られる張り出し（外柵形）や土塁の規模・空堀の幅から考えて、16世紀後半代の形態を示している。
- ④ V郭東側の屋敷址・虎口（内柵形状）や南西端の土塁状遺構を城に伴うものと考えれば、16世紀末あたりの形態も考えられる。
- ⑤ 位置的にみて、背後の丘陵から見通されてしまうことから、この方面の真里谷城との関係が元来は密接であったと思われる。

(2) 発掘調査の成果

- ① A区は弥生時代から古墳時代後期にかけての大集落が予測されることと、近世後半の寺院に伴うと思われる井戸状遺構の検出。
- ② B区は明瞭ではないが、黒色土の厚さが1m以上あり盛り土造成の可能性が考えられる。時期としては城に伴う造成が最も妥当であろう。
- ③ C区も古墳時代後期の集落が予測される。また、唯一の中世遺物と思われる羽口の出土状況と旧表土層の関係から、この地区も盛り土整形が行われていた可能性がある。
- ④ 明性院郭は、A区の発掘による限り中世遺構や遺物が検出されず、生活空間の場としては利用されていなかった可能性が考えられる。

以上、測量調査と発掘調査の成果の要点を列挙してみたが、考古学の本来的な武器である遺構・遺物から研究することが、全くといっていいほど出来ず、非常に曖昧な記述となってしまった。千葉県内では、中世城跡の発掘調査が近年多く実施されているが、一部分の調査であったり、調査方法の不備を除外しても、遺構・遺物を検出することが出来ない例が多いようである。このあたりで、他地域との比較の上で、流通や生活場所の問題を考慮しつつ、なぜ遺構・遺物が検出されないかという問題も考えてみる必要がある。

最後に、この報告書を記述するにあたり、佐是城跡の研究では第一人者である鈴木英啓氏には様々な面でお世話になり、また発掘調査において、調査補助員として参加して下さった佐是地区と新堀地区の皆様々に記して感謝の意を表したい。（敬称略）

宮沢濟，岩地徳次，白鳥正夫，宮沢勝夫

写 真 图 版



佐是城跡航空写真（約 1 : 13,000）



II 郭西側の支谷（南から）



明性院郭の空堀



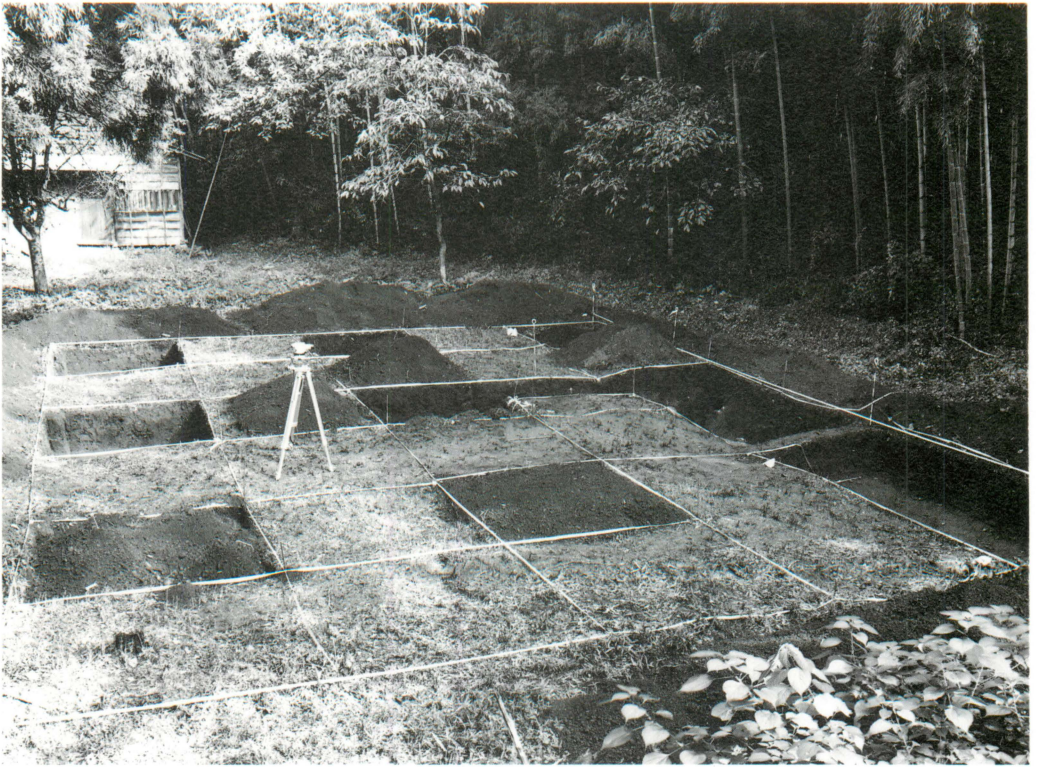
空堀 A（東から）



空堀 F（東から）



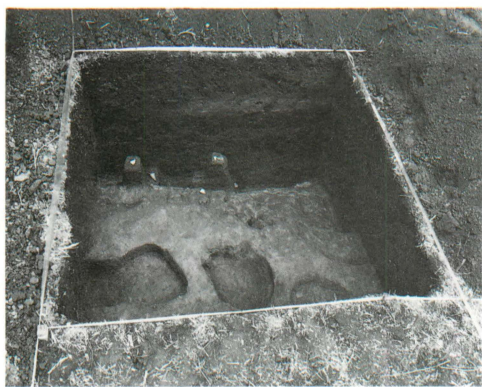
V 郭南西部端の土塁状遺構（南西から）



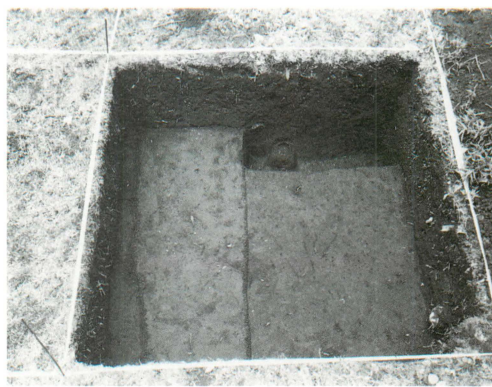
A区全景（南西から）



A区 001A号址遺物出土状況（北西から）



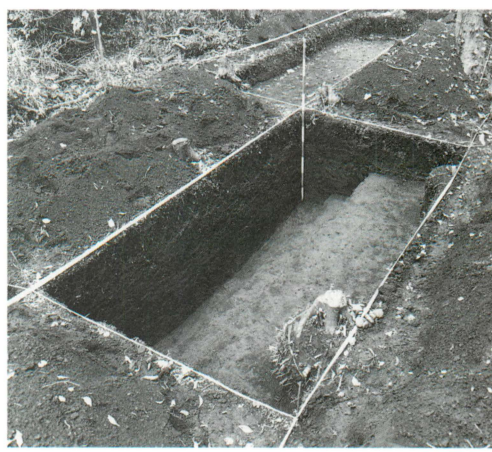
A区 001B号址遺物出土状況（西から）



A区住居址確認状況（北から）



A区調査風景



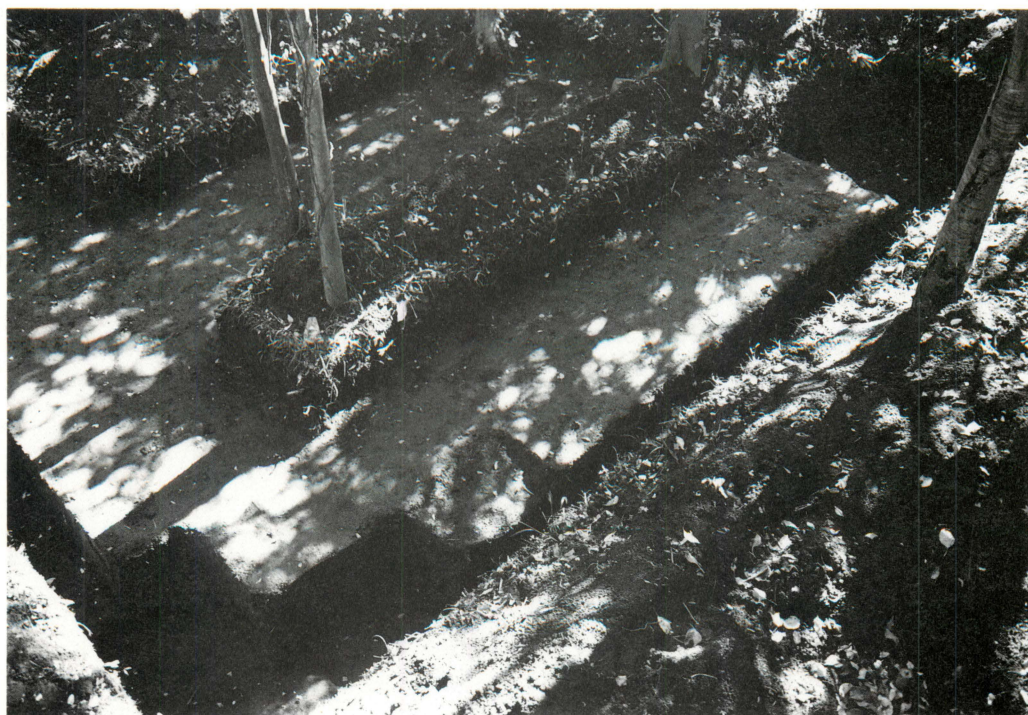
B区グリッド（南から）



B区全景（北から）



C区トレンチ（北西から）



C区トレンチ（北から）



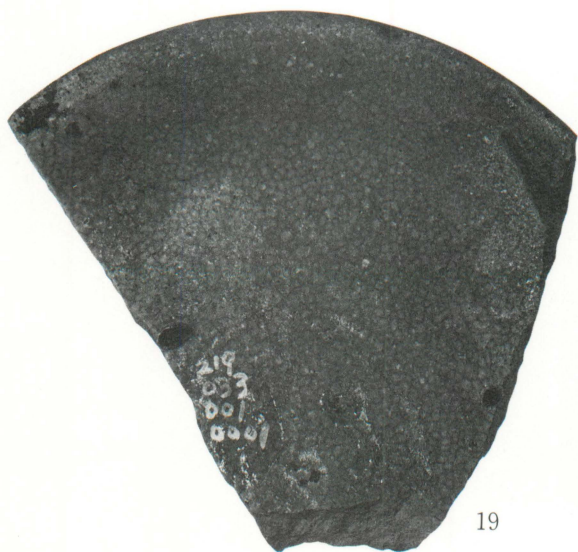
9



18



20



19



21



22

II 富浦町岡本城跡



千葉県

II 富浦町岡本城跡

1. 岡本城跡の位置と地理的環境 (II-1・2 図)

岡本城跡は、安房郡富浦町豊岡字聖山及び字用害に所在する。国鉄内房線富浦駅から北東に約400mのところにある。城跡の真下を内房線聖山トンネルが通り、西端に国道127号線が走っている。

地理的には安房地方南東にあたり、安房丘陵が海岸部までせり出している。丘陵は平坦面が狭く樹枝状に入り組んだ尾根状の丘陵と、その基部にあたる標高200m～300mの山地から形成される。城跡はこのような、山地から海岸部へせり出すように延びた樹枝状尾根の先端部に占地している。

また、この樹枝状尾根に沿って小河川が流れ、海岸部では小規模な沖積平野をいくつも形成している。現在の市や町の中心部は全てこのような平野部に展開している。

城跡もまた同様な位置にあり、北は汐入川が形成した極めて小規模な沖積平野に面し、南は岡本川が形成した沖積平野に面している。後者は、東西2.5km、南北1.5km程の規模で、現在は富浦町の中心地となっている。

城跡は、標高66mを最高所とし、標高20m程のところまで城跡に取り入れており、高低差の大きい形態を示している。沖積面の標高は北側で5m、南側で10m程である。

城跡からの眺望は海側と南方に開け、特に海岸は対岸の三浦半島のみならず、大島、伊豆半島まで視界に収めることができる。南方は南側沖積平野部は完全に視界に入るが、館山平野については、途中標高107mの堂山が遮りわずかに館山湾が望まれるだけである。

現在城跡は、尾根上の西側主郭部が富浦町が管理する里見公園として整備されている。またこの公園の範囲が町指定史跡の岡本城である。他の郭、腰曲輪はおおむね全国的に名声の高い町特産のビワの畑となっている。しかし、城跡の大部分が土地利用されているにもかかわらず、遺構の遺存状況は極めて良好といえるであろう。

2. 岡本城跡の歴史的環境 (II-1・2 図)

岡本城跡は、天正18年(1590)に書かれたと思われる毛利家文書所収の「関東八州諸城覚書」に、里見義康(里見家9代)の居城として記載されている城で、県内では珍しく時期の判明する城跡である。以下里見氏の歴史を概観して岡本城の歴史について述べてみることにしたい。

里見氏初代は義実といわれ、嘉吉元年(1441)の結城合戦後安房に逃れ房総里見氏を興したと一般的には受け入れられている。しかし、史料からみる限り3代義通までしか溯ることしかできず、時期的には16世紀初頭となる。ただ、この頃にはほぼ安房一国を平定していたらしく、



- 1 岡本城跡
- 2 金谷城跡
- 3 勝山城跡
- 4 宮本城跡
- 5 滝田城跡
- 6 館山城跡
- 7 干田城跡
- 8 稲村城跡
- 9 大井城跡

II-1 図 岡本城跡と周辺の主な城跡
 (国土地理院「那古」「館山」1:50,000使用)

16世紀の20～30年代には館山平野に位置する稲村城（館山市）を居城とする。稲村城の位置を考えると、この時点で安房地方最大の生産基盤を押さえていたといえるであろう。天文2年（1532）、同3年の稲村城を舞台とした内紛を経て義堯が実権を握ることとなった。

その頃、上総では小弓公方足利義明が勢力を有し、天文7年（1538）足利義明を盟主に上総武田氏や里見氏の連合軍と後北条氏によって第一次国府台合戦が行われたが、後北条氏の勝利に帰した。しかし里見氏にとってこの敗戦は、足利義明の敗死と上総武田氏の衰亡を意味し、結果的には上総進出の契機となった。

東上総方面は、重臣の正木氏が担当し勝浦、大多喜へと進出し、内房沿いは後北条氏による攪乱が原因である在地土豪の反乱を押さえ、また東京湾の制海権を争いながら上総を領国化していった。しかし、永禄7年（1564）の第二次国府台合戦によって再び後北条氏に敗れ上総の大半を失い、現在の夷隅郡東半を基盤とする土岐氏や山武郡域の酒井氏、長生郡域の宍南武田氏が後北条氏方となるものの、他の上総国内は再度里見氏の領国となった。

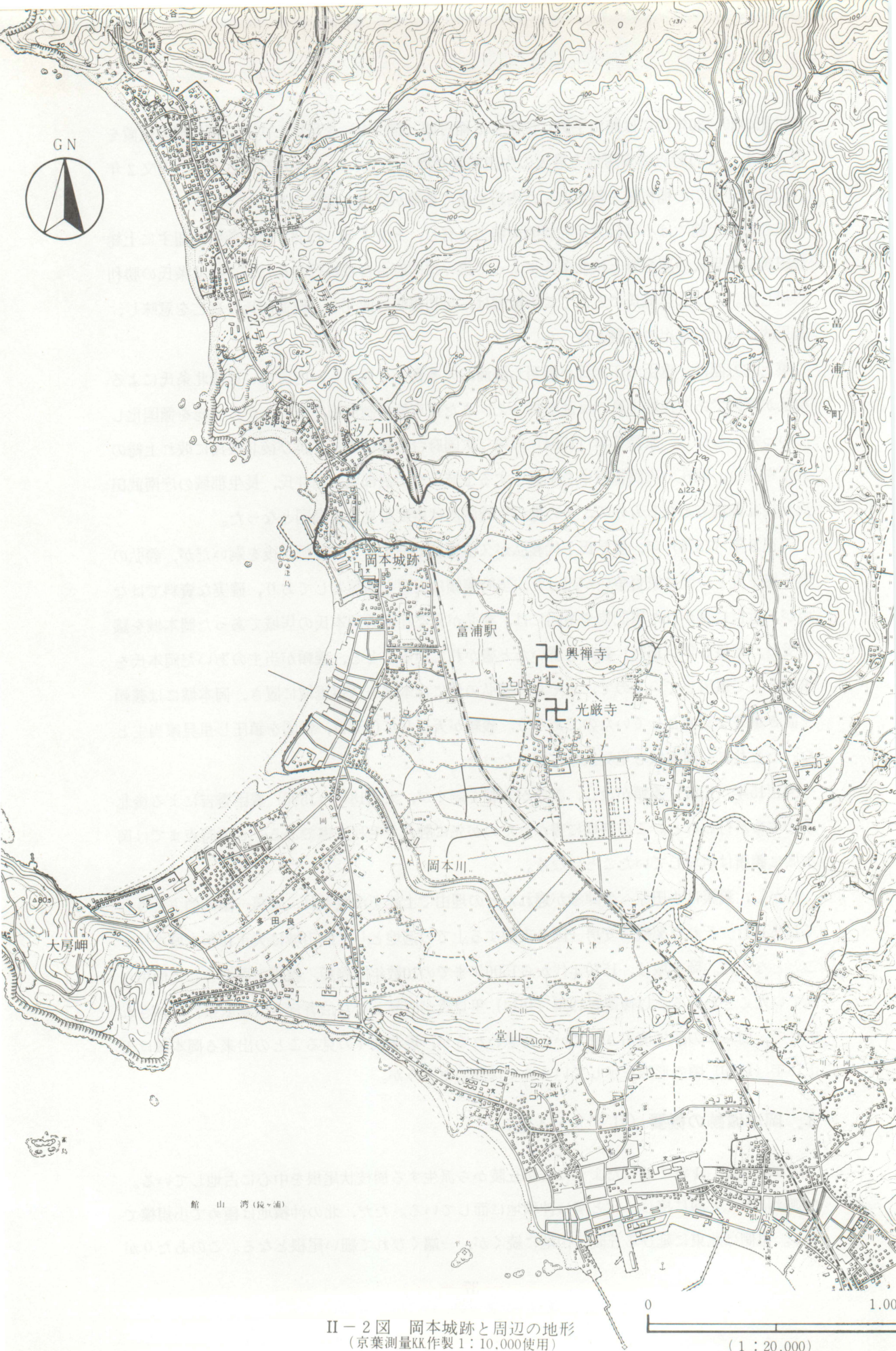
天正6年（1578）年、里見氏7代義弘が久留里城で没すると、義頼が後を嗣いだぐが、義弘の実子梅王丸との間に家督争いが起った。当時義頼は安房を基盤としており、確実な資料ではないが、近世に書かれた軍記物や系図には、義弘が元々在地の岡本氏の居域であった岡本城を譲り受け、元龜3年（1572）義頼を置いたと書かれていることと、義頼が当主のあいだ岡本氏を重臣として重用しているの、おそらく義弘の代には本城を久留里城に置き、岡本城には義頼を置き重要な支城としていたのであろう。義頼が天正9年（1581）、領国を鎮圧し里見家当主となったと共に、岡本城も里見家の本城となった。

天正15年（1587）義頼が没し、義康が家督を嗣ぐが、天正18年（1590）豊臣秀吉による後北条氏攻めが行われる。この時期に書かれたのが先に触れた毛利文書である。この時点までは岡本城に義康は居城していたことになる。

しかし、義康は小田原への陣参が遅れたとの理由で上総を没収され、安房一国の領主とされてしまった。それを契機に安房一国を支配する上での適地として館山城に天正18年本城を移すこととなった。岡本城は、1570年代から1590年までの10数年間義頼、義康の居城として使用されていたこととなる。以後慶長19年（1614）里見氏が改易となり伯耆倉吉（鳥取県）へ移されるまで、何らかの形で使用されていたと思われるが、現在我々の見ることの出来る岡本城は天正18年（1590）頃の形態を示しているのではないだろうか。

3. 岡本城跡の概要（II－2・4図）

岡本城跡は、1章で述べたように安房丘陵から派生する樹枝状尾根を中心に占地している。西側はほとんど海に接し、北と南は沖積地に面している。ただ、北の沖積地は極めて小規模である。東側は北東に延びる丘陵・山地に続くが、一端くびれて細い尾根となる。このあたりが



II-2 図 岡本城跡と周辺の地形
 (京葉測量KK作製 1 : 10,000使用)

(1 : 20,000)

城跡の東端となる。

規模は、東西600m、南北300mを有し、尾根上で東から西へ標高64m、66m、56m、60mと変化している。比高差はやはり尾根上と沖積面とでは最大60m程あり、数値以上に見た目には山城に近い印象をうける。

全体の構造（縄張り）は、尾根上に3ヶ所の郭、中段に1ヶ所の郭、裾部に4ヶ所の郭（註1）があり、また斜面には多数の腰曲輪が認められる。以下各郭を中心に述べることにする。

I 郭周辺

尾根上全域を字聖山と呼び、尾根上の北西部に位置し、大きく3ヶ所に分けられる（I a～I c 郭）。I 郭は近世城郭では本丸に相当するが、佐是城等の台地上の郭に比べ、地形的制約から細長い形態となり、しかも高所であることから、日常生活の場としては捉えにくい。

I a 郭はI 郭の中では最も標高が高いが、最大巾でも10m程しかなく、せいぜい眺望がきく利点（図版II-3）を活用した郭であろう。しかし、（ア）に削り残しの土橋（図版II-4）があり、I a 郭側に土塁が認められることは、I b 郭側からの攻撃を想定している。落城寸前に逃げ込み、搦手口から落ち延びる為であろうか。I a 郭北東下に2ヶ所虎口（城の出入口）があり、それらを通して降りるのかもしれない。（イ）は枝尾根の先端を削り残して土塁状の高まりにしたもので、通り道を狭くすると共に遮へい物ともなっている。（ウ）は斜面を奥行7m程垂直に近い形で掘り込んでいる（図版II-4）。やはり虎口を狭くすると共に斜面での敵の移動を防ぐ目的のために作られたものであろう。また下の腰曲輪の面積を拡げることにもなる。類例としては、岡本城と同時期で里見氏の支城であった造海城（富津市）にも認められる。（エ）も虎口であろう。（オ）には短い土塁と堅堀があり、（カ）は小規模な空堀である。その先端は調査不能のため確認していないが、若干の平坦地があるようだ。I b 郭先端に若干の発掘調査を実施した。

I b 郭は、尾根上の郭群の中では唯一平坦面で形成されている。かなり手を加えていると思われる。発掘調査の大部分をこの郭で実施した。空堀AでII 郭と区切られる。I a、I b 郭が里見公園として活用されている。

I c 郭は、I b 郭より10m程近く、あるいは独立した郭として捉った方がいいのかもしれない。1m程の段差で2ヶ所に分かれる。

II 郭周辺

II 郭は郭面としては最も標高が高く65m～67mを測り、I b 郭よりも10m程高い。しかし、現状は郭面でかなり凹凸があり、また小面積なことから機能面からはあまり重要視されなかったと思われる。（ク）と（ケ）は腰曲輪を築く際に掘り残された土塁である。空堀Bは上幅25mを測り、鉄砲を意識した規模である。西端に腰曲輪を付設している。

III郭周辺

III郭は全体に掘り下げた平坦面を造り出している郭であるが、南半は旧地形の残りか傾斜している。北辺両端は削り出しによる段がある。(コ、図版II-5)は石塁状遺構が40m程にわたって外側に認められる。使用されている石はこの岩盤である凝灰質泥(砂)岩で、極めて軟質で加工しやすい。城跡内のいたる所でピワ畑の段に石積みとして用いられているので廃城後の所産とも考えられるが、この石を使った石垣が造海城(富津市)にみられ、また未見ではあるが、山之城(鴨川市)に石垣(川名1983)、天羽城(富津市)に石塁(野中他1981)があることから、城に伴う施設の可能性も充分考えられる。(サ)は枝尾根先端を掘り残し堀切状になった虎口である。(シ)は土塁と小面積の腰曲輪2ヶ所からなる出丸的な施設である。III郭から(シ)に至る尾根上は上幅が2m~3mしかなく、しかも東側は垂直に近く削り落されている。(ス)は一辺8m程の正方形に近い平面プランをもつ水堀である(図版II-6)。地元では「榊ヶ池」と呼ばれ城井戸とされている。深さは現状ではヘドロが堆積し浅い印象を受けるが、ボーリング探査によれば水面下3mで底に達しなかった。常時水が貯えられていることから、井戸としての役目も果たしていたであろうが、尾根筋を切断し、城の西端に位置することから、本来的には堀としての防禦施設であろう。また両翼に腰曲輪が同レベルで続くことは、両方の腰曲輪での移動をも防ぐこととなる。現在のところ、県内で類例を実見したことはないが、他地域でみれば高取城(奈良県高取町)の水堀と類似するようであるが、全国的にみても山城ないしは丘城の水堀は極めて特異なものであろう。小高春雄氏の御教示によれば、長生郡下の中世城郭に、尾根基部を切断する空堀の中に方形の落ち込みを設け尾根に平行して両端を狭く掘り残す遺構が何例かあるという。ただ、この場合水は貯えられていない。

IV郭周辺

2m程の段差と(セ)の堀によって北からIVa、IVb、IVcの3ヶ所の郭に分けられる。それぞれ標高43m、41m、42m程を測る。尾根から中段に位置する。

V郭周辺

尾根裾部に位置し、標高18mを測る。V郭の北西側にも2段の平坦面があり、この箇所もV郭の一部に含めるべきであったかもしれないが、現在人家が建て込み当時の状況を復元することが難しいので城域には含めなかった。

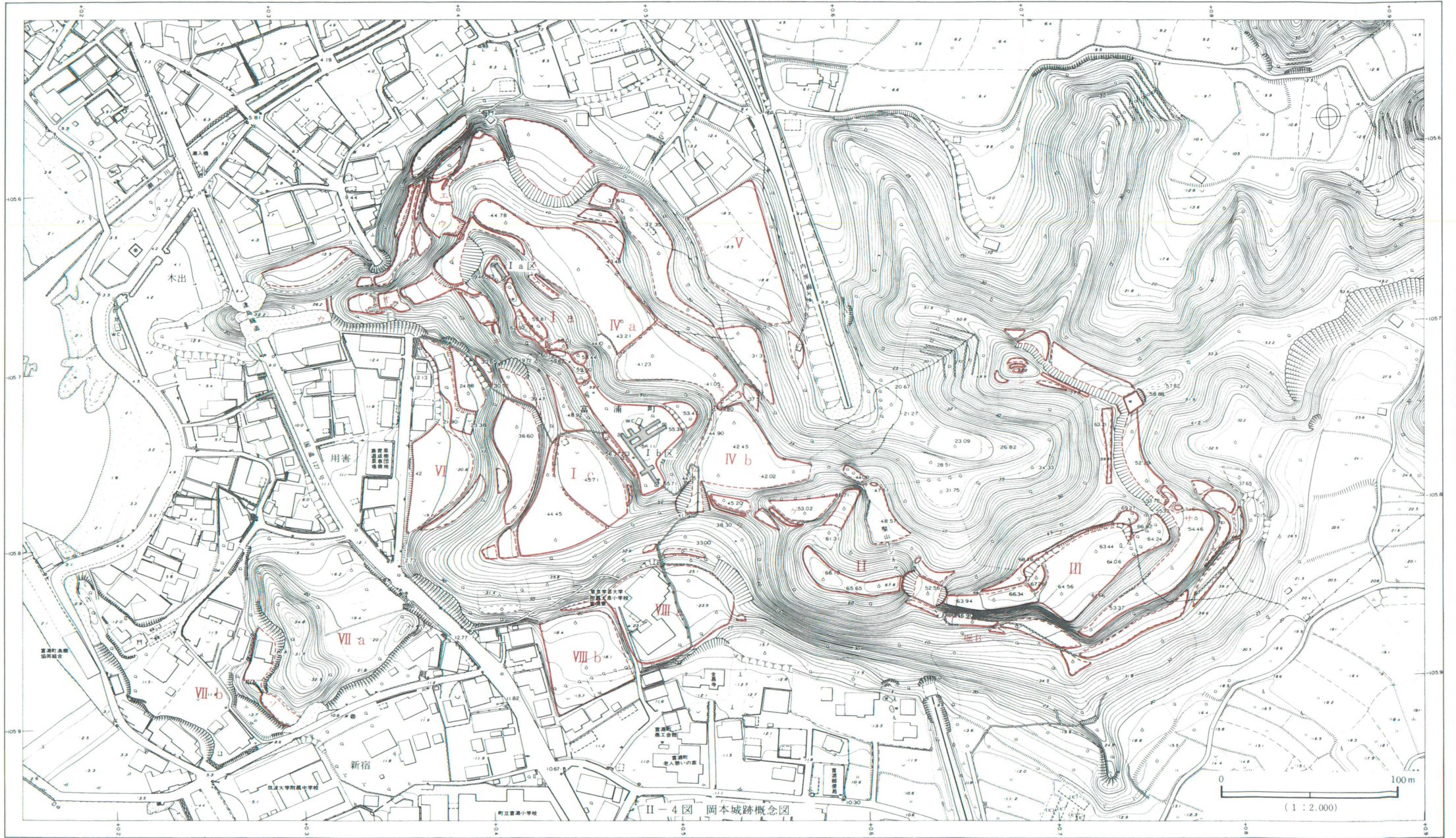
VI郭周辺

従来VI郭あたりが里見氏の居館跡と推定されてきた。VI郭前面を小字名「用害」という。「要害」が転化したものである。IVa郭から西へ突き出した尾根とVII郭とに挟まれ前面は海である。VI郭本体は標高20m前後、前面の平坦部は5m~12mを測る。

VII郭周辺

標高32m~34mの山塊を境にVIIa郭とVIIb郭に分けられる。VIIb郭側の山塊斜面上に腰曲輪が





認められる。(ソ)は切り通し状になっており腰曲輪間を結ぶ通路である。VII b 郭には現在大宮八幡社が建っている。

VIII 郭周辺

現在、東京学芸大学付属大泉小学校富浦寮が建っている場所をVIII a 郭に、それより5 m程低い場所をVIII b 郭とした。平面プランはほぼ方形をなし、自然地形に逆らうかのように沖積地に張り出す印象を受ける。かなり人為的に盛り土をした結果ではないだろうか。VIII 郭は、①沖積地に面している。②規格性の強い方形プランをなす。③主郭に最も近い距離にある裾部の郭等から、この郭を里見氏の居館跡と比定したい。

以上各郭について概観したが、次に周辺の字名についてみると、城跡北西端の沖積部に「木出」と呼ばれる字名がある。金谷城(富津市)に同名の字が、勝山城(鋸南町)に「鬼出越(キデゴシ)」, 造海城に「木出根」があり、「木出」は城郭に伴う用語であることかは確実である。また、VI 郭前面は「用害」、VII a 郭からVIII 郭にかけては「新宿」「田宿」があり、源初的な城下町を形成していたと考えることができる。

註

1. ここでの郭と腰曲輪の違いは、前者については広い面積を有すると共に奥行があることと、平坦部の位置、より人為的に手を加えている点などを考慮した。

4. 発掘調査とその概要 (II - 3 ~ 7 図)

(1) 調査方法と調査経過

発掘調査は、昭和60年11月18日から同月28日までの間で、実質9日間にわたって実施した。調査は、発掘区の設定から始まり、I a 郭とI b 郭に2ヶ所設定した。郭名からそれぞれI a 区、I b 区と呼称し、地形に沿って軸線を設けたため、ほぼ北西-南東方向となった。

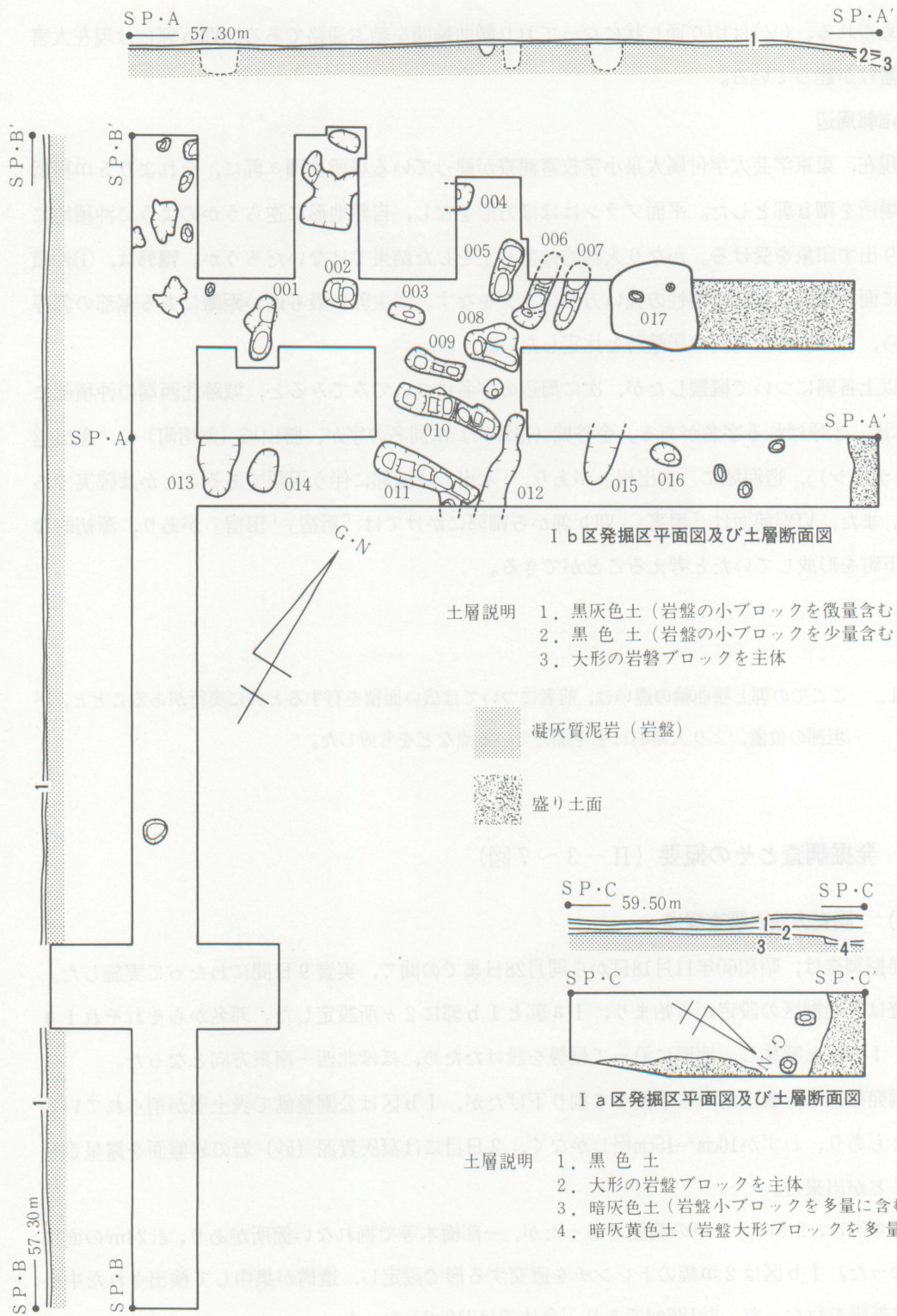
両発掘区とも表土層から手掘りで掘り下げたが、I b 区は公園整備で表土層が削られていることもあり、わずか10cm~15cm程しかなく、2日目には凝灰質泥(砂)岩の岩盤面を露呈させることが出来た。

I a 区は、2.5m×9mの範囲であったが、一部樹木等で掘れない箇所があり、計24m²の面積となった。I b 区は2m幅のトレンチを直交する形で設定し、遺構が集中して検出された中心部は拡張を行なった。計186m²であり、全体では210m²となった。

(2) 調査区概要

① I a 区

2章城跡の概要で述べたI a 郭北西端である。現在は里見公園内でよく手入れがされ、眺



I b 区発掘区平面図及び土層断面図

- 土層説明
1. 黒灰色土 (岩盤の小ブロックを微量含む)
 2. 黒色土 (岩盤の小ブロックを少量含む)
 3. 大形の岩盤ブロックを主体

凝灰質泥岩 (岩盤)

盛り土面

I a 区発掘区平面図及び土層断面図

- 土層説明
1. 黒色土
 2. 大形の岩盤ブロックを主体
 3. 暗灰色土 (岩盤小ブロックを多量に含む)
 4. 暗灰黄色土 (岩盤大形ブロックを多量に含む)

0 10m

(1:200)

II-5 岡本城跡発掘区平面図及び土層断面図

望の素晴らしい場所である。

表土面から手掘りで掘り下げ、30cm～40cmの深さで岩盤面に達したので、グリッド内をそのレベルまで下げた。北西部と北東部は岩盤を多く含んだ土の盛り土面で、残りは岩盤面である。岩盤面は平坦に削り出されている。

遺構 はたして遺構かどうか判断に迷うが、岩盤面に掘り込まれた径50cm、深さ40cm程のピットが検出された。明瞭な掘り方ではない。

遺物 表土層上面で近世、近代の陶磁器が3点、岩盤面直上で常消系大甕片（II-7図、9）が3点出土。2点が接合、もう1点も同一個体である。

② I b 区

I b 郭中央部に当たる。現況は里見公園でI郭の $\frac{2}{3}$ 以上に桜が植えてあり、調査は桜を避けて行なった。

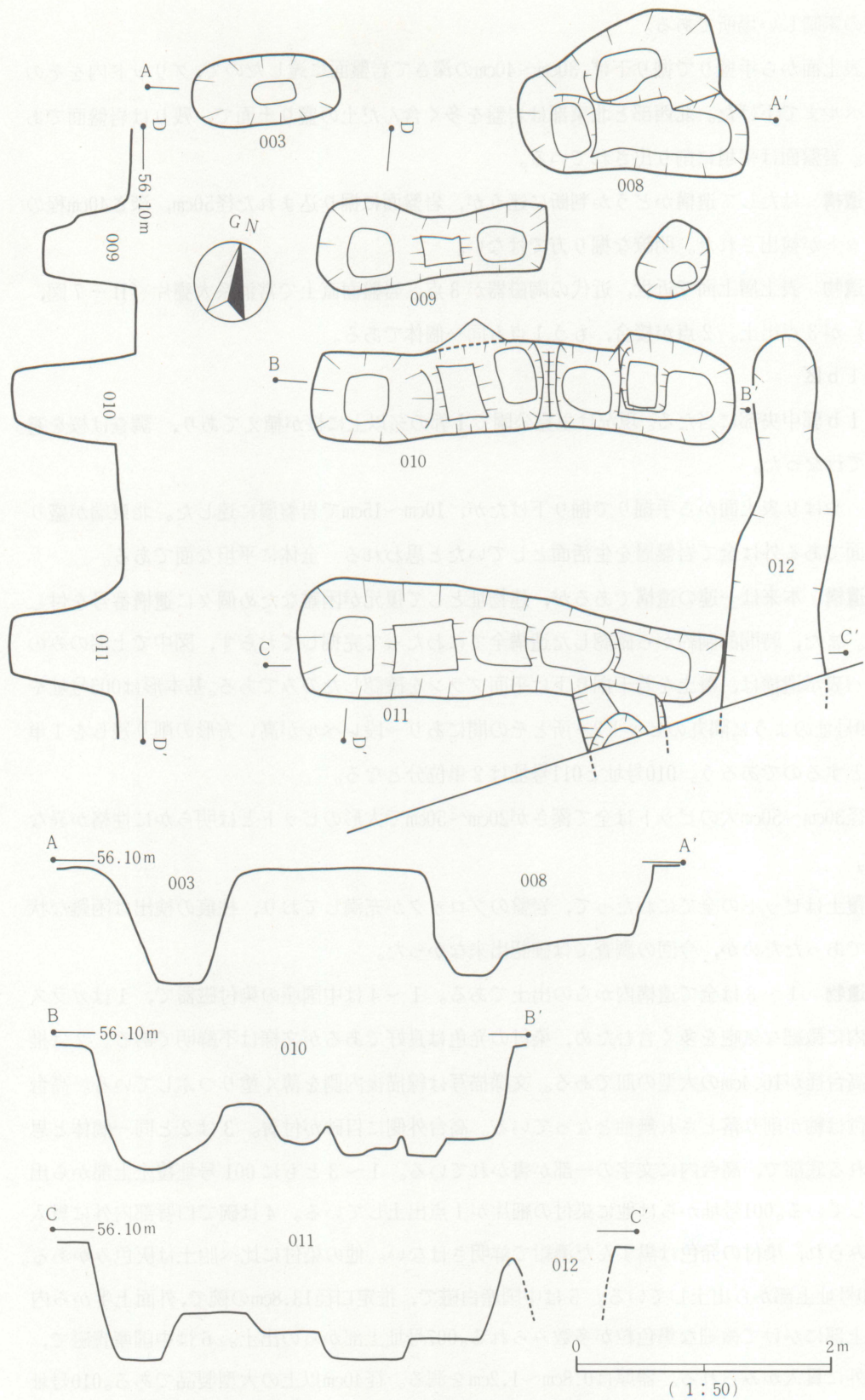
やはり表土面から手掘りで掘り下げたが、10cm～15cmで岩盤層に達した。北東端が盛り土面である外は全て岩盤層を生活面としていたと思われる。全体に平坦な面である。

遺構 本来は一連の遺構であるが、建物址として復元が困難なため個々に遺構番号を付した。また、時間的制約から確認した遺構全てにわたって完掘しておらず、図中で上端のみのケバ表示遺構は、覆土を若干掘り下げ平面プランを確認したのみである。基本形は005号址や009号址のように隅丸のピット2ヶ所とその間にあり一段レベルが高い方形の削り残しを1単位とするのであろう。010号址と011号址は2単位分となる。

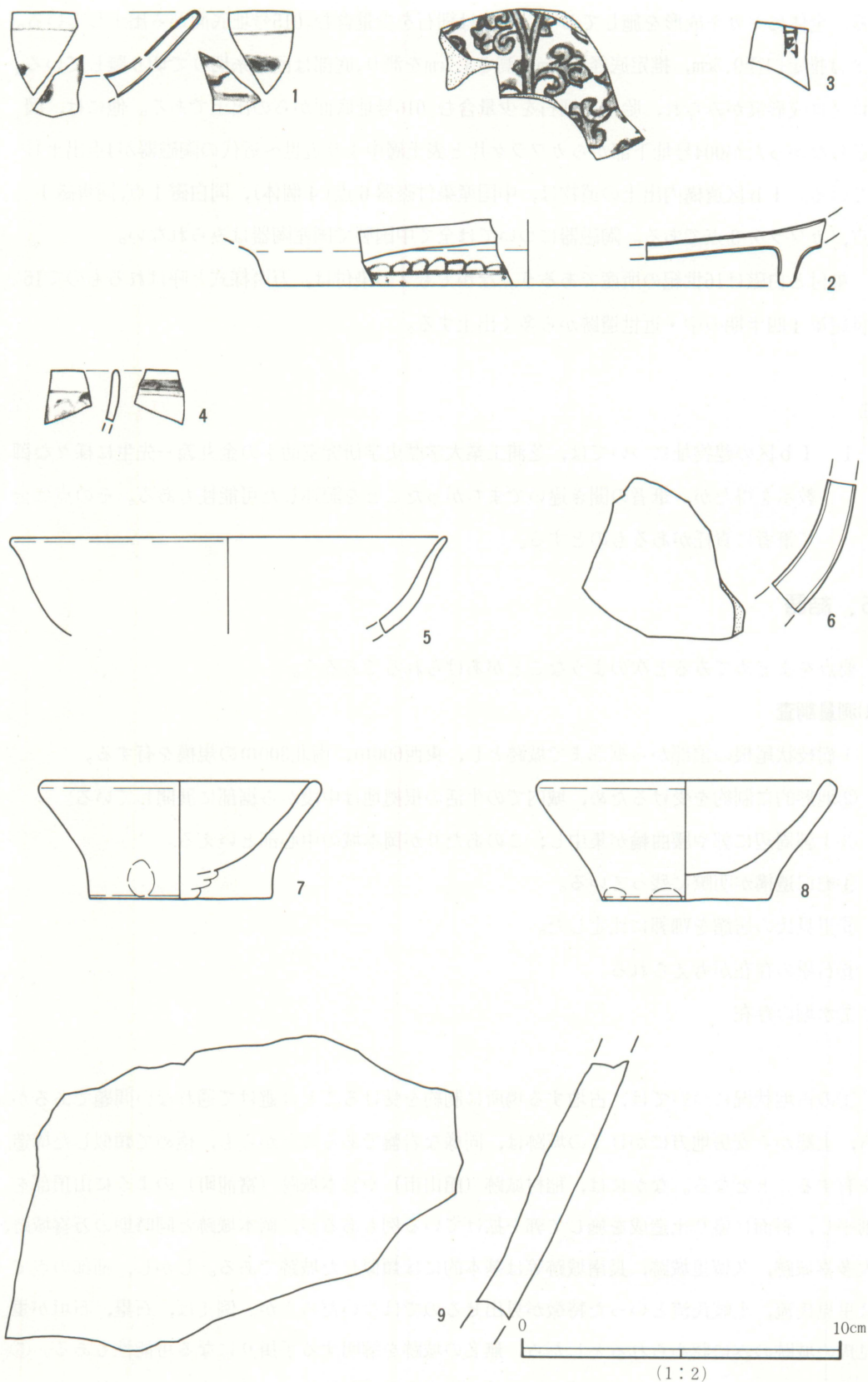
径30cm～50cm大のピットは全て深さが20cm～50cmで大形のピットとは明らかに性格が異なる。

覆土はピットの全てにわたって、岩盤のブロックが充満しており、柱痕の検出は困難な状況であったためか、今回の調査では確認出来なかった。

遺物 1～8は全て遺構内からの出土である。1～4は中国産の染付磁器で、1はガラス釉内に微細な気泡を多く含むため、染付の発色は良好であるが文様は不鮮明である。2は推定高台径が16.4cmの大型の皿である。文様描写は線描後内側を薄く塗りつぶしている。高台畳付は釉が削り落とされ無釉となっている。高台外側に目砂が付着。3は2と同一個体と思われる底部で、高台内に文字の一部が書かれている。1～3ともに001号址覆土上部から出土している。001号址からは他に染付の細片が1点出土している。4は碗で口唇部内外に貫入がみられ、染付の発色は黒ずんだ濃紺で鮮明さはない。他の染付に比べ胎土は灰色みがある。010号址上部から出土している。5は中国産白磁で、推定口径13.8cmの碗で、外面上半から内面上部にかけて微細な黒色粒が多数みられる。007号址上部からの出土。6は中国産青磁で、内外に貫入がみられる。器厚は0.8cm～1.2cmを測る。径40cm以上の大型製品である。010号址上部からの出土。7、8はカワラケで、7は推定口径9.0cm、推定底径5.8cm、高さ3.7cmを測



II-6 岡本城跡 I b 発掘区主要部平面図及びエレベーション図



II-7 岡本城跡出土遺物実測図

る。全体にミガキ成形を施しており、胎土は細石を少量含む。015号址底面から出土している。8は推定口径9.5cm、推定底径5.2cm、高さ3.7cmを測り、底部は回転糸切りで切り離している。ロクロ成形痕がみられ、胎土は細石を少量含む。016号址底面からの出土である。他には、図示しなかったが004号址下部からカワラケ片と表土層中より近世～近代の陶磁器が4点出土している。I b区遺構内出土の遺物は、中国産染付磁器6点(4個体)、同白磁1点、同青磁1点、カワラケ3点である。陶磁器については全て中国製で国産陶器はみられない。

染付と白磁は16世紀の所産であろう。なかでも2の染付は、万暦様式と呼ばれるもので16世紀第4四半期中・近世遺跡から多く出土する。

註

- 1 I b区の建物址については、芝浦工業大学歴史学研究室助手の金丸義一先生に様々な御教示を得たが、筆者の聞き違いでまちがったことを記述した可能性もある。その点は全て筆者に責任があるものとする。

5. 結語

要点をまとめてみると次のようなことがあげられるであろう。

(1)測量調査

- ①樹枝状尾根の頂部から裾部まで城跡とし、東西600m、南北300mの規模を有する。
- ②地形的に制約を受けるため、城内での生活の根拠地は中段から裾部に展開している。
- ③I郭周辺に郭や腰曲輪が集中し、このあたりが岡本城の中心部といえる。
- ④虎口遺構が明瞭に残っている。
- ⑤里見氏の居館をVIII郭に比定した。
- ⑥石塁の存在が考えられる。
- ⑦水堀の存在

①の占地状況については、占地する場所に制約を受けることは避けて通れない問題であるから、上総から安房地方にかけての城跡は、同様な岩盤であることから、極めて類似した構造を有することとなる。なかには、稲村城跡(館山市)や宮本城跡(富浦町)のように山頂部を削平し、斜面に盛り土造成を施して郭を拡げている例もあるが、岡本城跡と同時期の万喜城跡、大多喜城跡、久留里城跡、長南城跡等は基本的には類似した城跡である。しかし、細部の点では里見氏流、土岐氏流といった特徴が見出せるのではないだろうか。例えば、石塁、石垣が里見氏の城跡のみに認められるとしたら、無名の城跡を解明する手掛りになる可能性もある。⑤の居館の問題であるが、岡本城跡内で居館に比定出来る郭はVIII郭の他にIV、V、VI郭が考えら

れる。しかし、IV、V郭は北面し広い方の沖積地に面していない。このことは、16世紀終末期の時期において経済活動を抜きにしての領国経営は考えにくく、また当時里見氏の敵対勢力は北方になることも否定的要因である。VI郭は両脇を防禦施設に守られ、小字名も用害と呼ばれ、可能性の高い郭であるが、IV、V郭同様経済活動の面で限定される。そして最も重要なことは海に面していることである。里見氏と後北条氏の間には東京湾を挟んで水軍同士の争いが続発しているため、位置的には危険が大き過ぎると思われる。⑥の石塁については、他の城跡での類例の増加をまって判断したい。⑦については、他の里見氏の城跡に存在するのか、もし存在するならば里見氏の特徴として捉えることも可能となる。

(2)発掘調査

- ① I a 郭北端は現状以上にかなり削平されていた。
- ② I b 郭に掘立柱建物が建っていたことが判明した。
- ③ I a 郭より常滑系甕、I b 郭より中国製磁器、カワラケが出土。中国磁器の年代は岡本城の存続時期に一致する。

②については、ほとんどの柱穴がほぼ東西、南北の軸線に乗り、また部分的な発掘であることから、建物の規模、棟数、新旧関係等全て不明である。しかし、柱穴が深いもので1m近くあり、底径が30cm以上あることから、かなり大形の建物を予測することができ、またI b 郭の性格から天守閣に相当するような高層の建物が建っていたとも考えられる。この2点を前提条件にして柱穴をみると、3ヶ所の柱穴を一単位とする掘り方は、柱と柱の間にヌキをわたす掘り方と捉えることができ、独立した一本一本の柱よりは横風による圧力に対してより強固なものといえる。ここに、高層の建物が建っていたと仮定したら、柱穴は全て岩盤に掘り込まれているので、上部からの力は無視出来るが、山頂という場所から当然強風が吹きやすいので、横風に対して細心の注意を払うこととなる。また礎石よりは掘立の方が横風に対して強固である。以上の点から、この特色ある掘り方の柱穴は、高層の建物を建てるために見合ったものといえるであろう。平面プラン上での規模が判明していない現時点で、あくまでも可能性の問題としてあえて触れてみた。③は、I b 郭出土の陶磁器に国産陶器が混っていない点に、何かI b 郭の性格を表しているのかもしれない。

最後に、調査の準備段階から終了後まで、御尽力頂いた富浦町教育委員会の大矢三郎氏をはじめ調査補助員として、発掘調査に参加して下さいの皆様記して感謝の意を表したい。(敬称略)

吉川健一、中山真知子、鈴木ふみ子、田嶋雅子、穂積キヨ子、平嶋みつ子、白石裕子(以上富浦町)、近藤弘実、笹田吹雪、高田孝雄(以上立教大学学生)

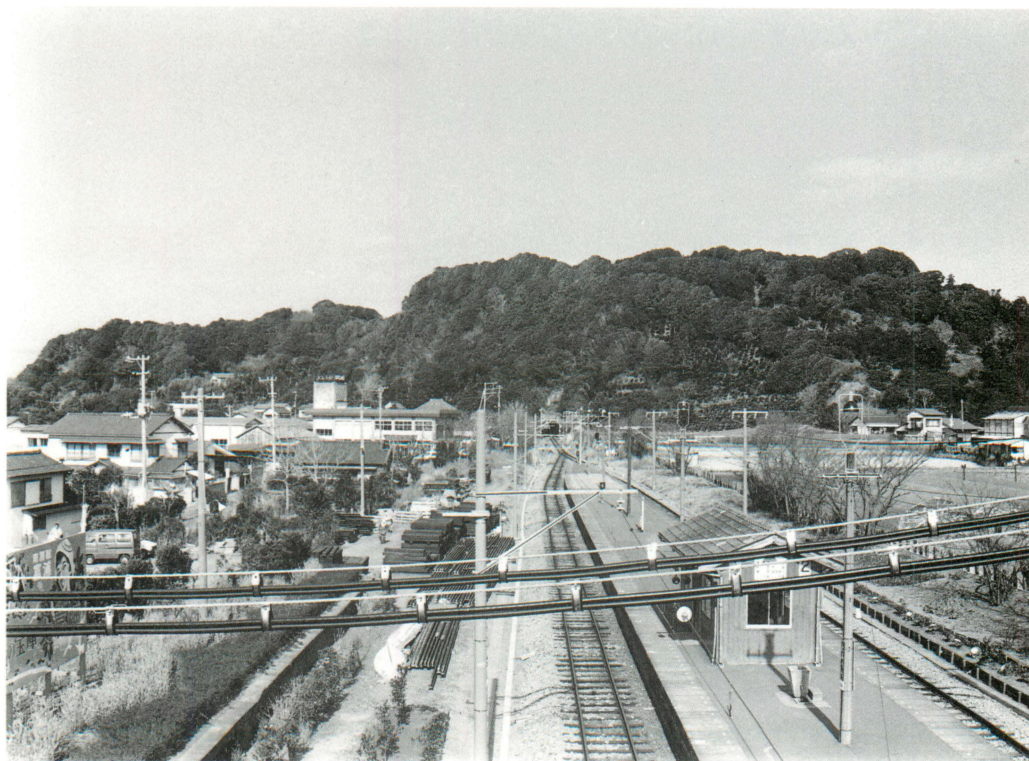
引用・参考文献（佐是城跡・岡本城跡）

- ・市原郡教育会編『市原郡誌』 大正5年
- ・大野太平『房総里見氏の研究』寶文堂書店 昭和8年
- ・「快元僧都記」『郡書類従』続郡書類従完成会 昭和34年
- ・千葉縣史編纂審議會『千葉県史料（中世編 諸家文書）』千葉県 昭和37年
- ・落合忠一 「佐瀬城跡をたずねて」『市原市地方史研究』第7号 昭和45年
- ・大多和晃紀『関東百城』有峰書店 昭和52年
- ・『館山城跡調査概報』〈第二次〉及び〈第三次〉館山城跡調査会 昭和54・55年
- ・伊礼正雄・小高春雄他『上総久留里城』君津市教育委員会 昭和54年
- ・神奈川県史編集室『神奈川県史資料編3 古代・中世（3下）』（財）神奈川県弘済会 昭和54年
- ・千野原靖方『房総里見水軍の研究』崙書房 昭和56年
- ・大木衛編『日本城郭大系6 千葉・神奈川』新人物往来社 昭和56年
- ・野中徹他『金谷城跡』金谷城跡調査団 昭和56年
- ・川名登『房総里見一族』新人物往来社 昭和58年
- ・天野努・永沼律朗「稲村城跡発掘調査報告」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集』千葉県教育委員会・（財）千葉県文化センター 昭和59年
- ・伊礼正雄・牛房茂行他『真里谷城跡』木更津市教育委員会 昭和59年
- ・鈴木英啓『石川城郭跡』（財）市原市文化センター 昭和59年

写 真 图 版



岡本城跡航空写真（約1：13,000）



岡本城跡遠景（内房線富浦駅から）



岡本城跡遠景（南東から）



I a 郭から大房岬を望む



I a 郭から北西を望む



I b 郭から南方を望む



I a 郭土橋（南東から）



I a 郭最高所（南東から）



空堀A（南から）



(ウ) 地点左側壁



(ウ) 地点中央～左側壁



(ウ) 地点右側壁



(イ) 地点虎口 (外から)



(イ) 地点虎口 (内から)



Ⅲ郭石罫状遺構 (コ)



Ⅲ郭石罫状遺構 (コ)



Ⅲ郭北東下の腰曲輪 (北西から)



里見義頼の墓 (光厳寺)



里見義頼の墓左側の宝篋印塔



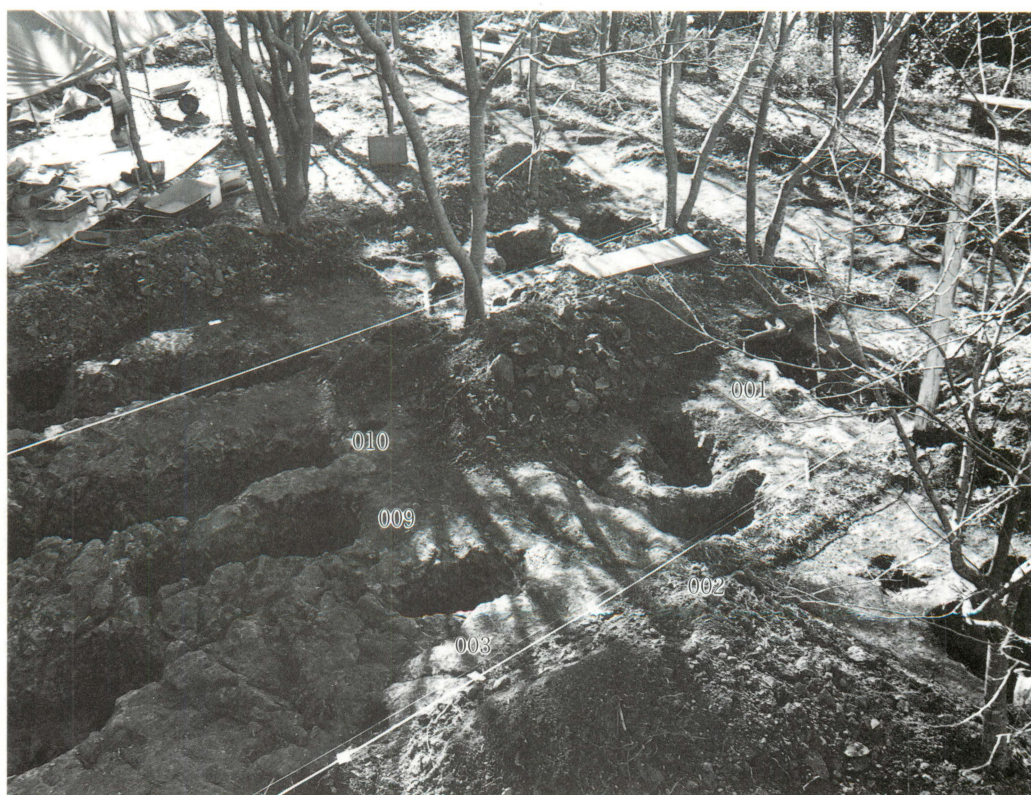
水堀（榊ヶ池）南から



水堀（榊ヶ池）北から



I b 区中央部完掘状況（北から）



I b 区中央部完掘状況（北東から）



I b区 010,011号址完掘状況(南西から)



I b区 010,011号址完掘状況(北東から)
(012号址は未完掘)



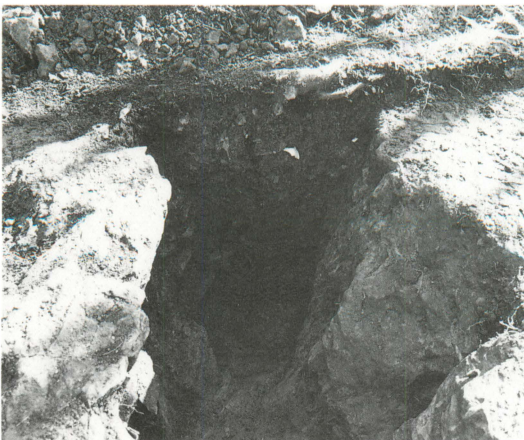
I b 区中央部掘り方状況 (南から)



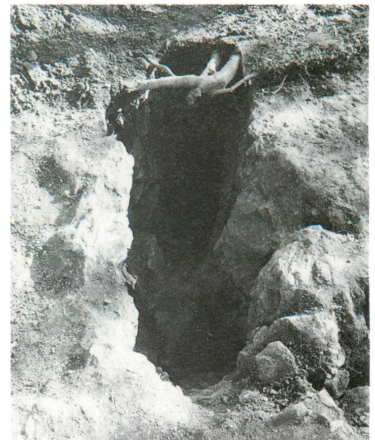
I b 区表土除去後



同表土除去後



I b 区 001号址半載状況



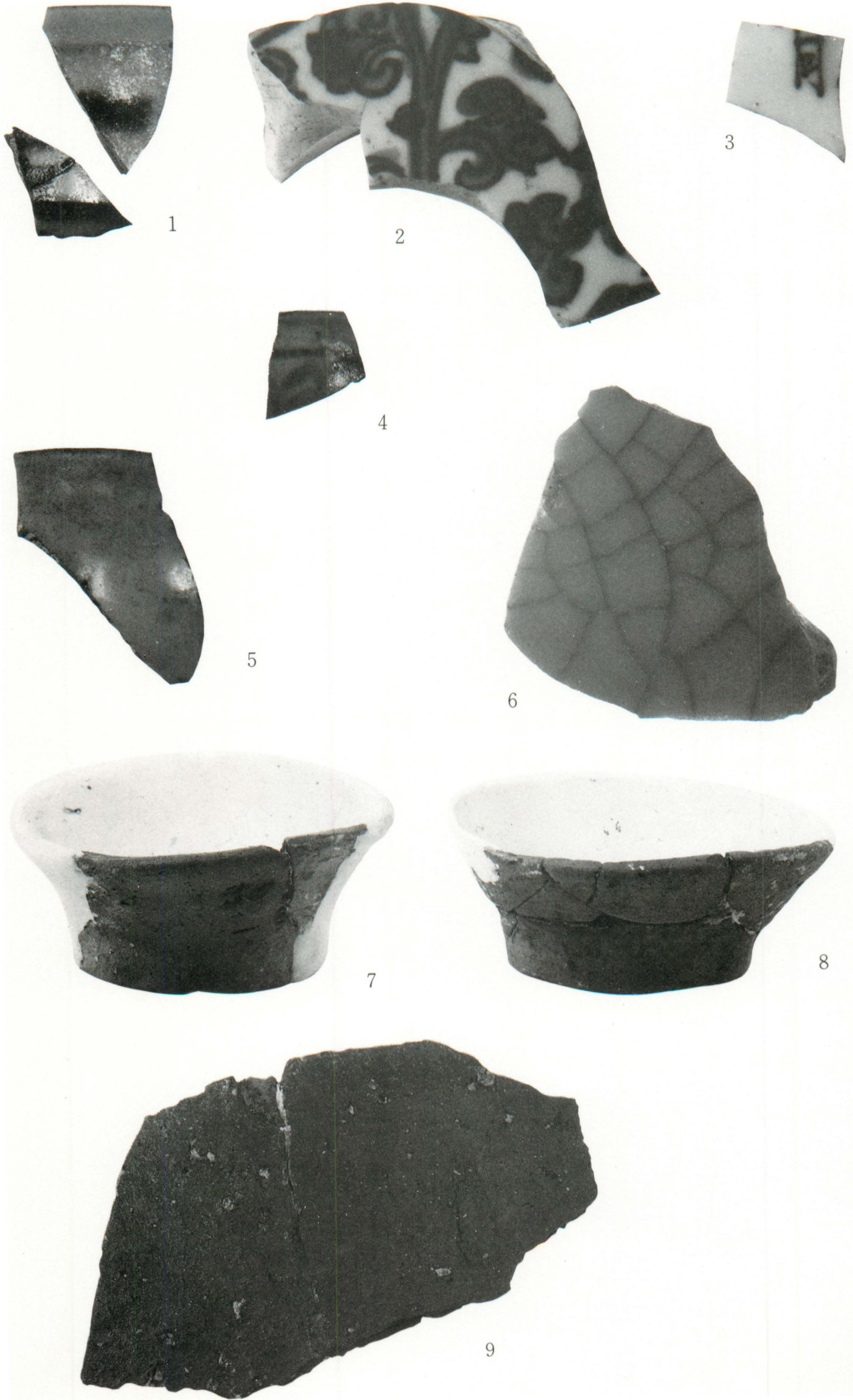
001号址完掘状況



I b区 017号址 (南から)



I a区全景 (南から)



岡本城跡出土遺物

千葉県中近世城跡研究調査報告書 第6集
—佐是城跡・岡本城跡発掘調査報告—

昭和61年3月31日発行

発行 財団法人 千葉県文化財センター
編集 千葉県葛城2丁目10番1号
印刷 有限会社 正文社
千葉県都町2丁目5番5号
